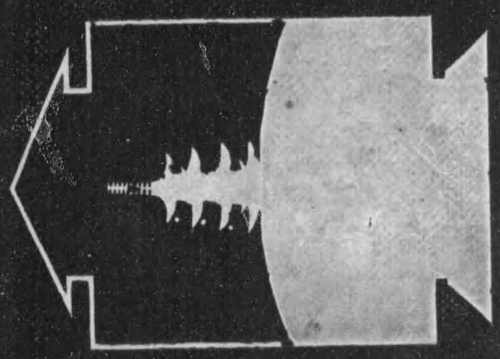
始



325
544

納
本

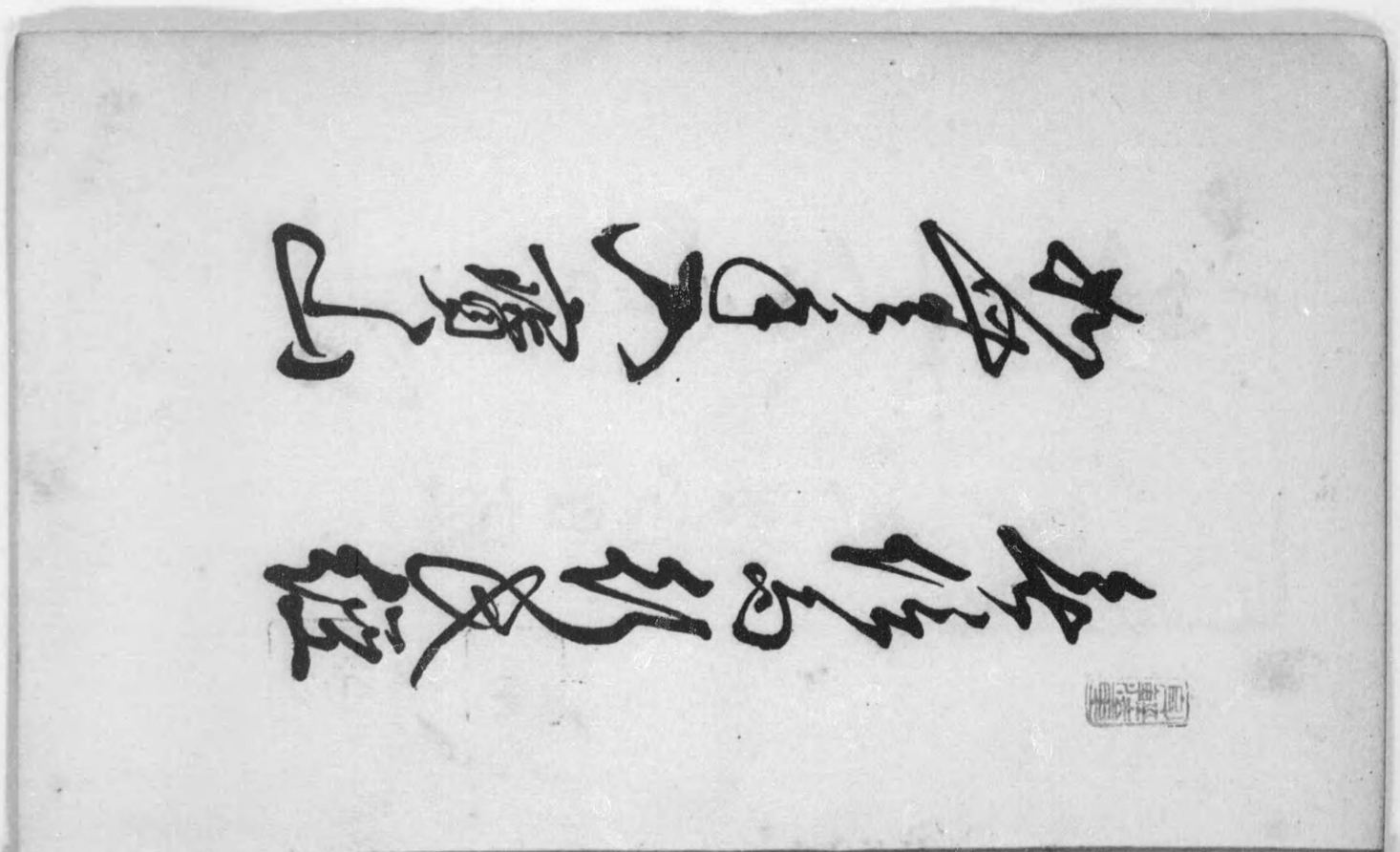
325-544

能仁事一著

法華經要解

東京 博文館藏版

大正
8.5.14
内交



無上仏千年道

大僧正日生

叙

曾て日宗の七色を擧す。一に曰はく自尊、二に曰はく試錬、三に曰はく團結、四に曰はく排他、五に曰はく元氣、六に曰はく健鬪、七に曰はく護國、所謂七色は七大特色なり、七大特色、汪洋として流れて護國に朝宗す。日本佛教、曹洞宗祖に賴りて尊王の高調あり、而して日蓮宗祖の出づるありて實に護國の唱首を獲たり。宗教は宗教の爲に存せず、乃ち社會の運營の一、實に社會の爲に存す。是故に生命ある宗教は、恒に社會の實地に其根柢を託し、宗教を復活するの雄圖は、時と處とに卽し、理と勢とを離れざる活人格の獨り懷くことを能くする所たり。

平安の枯枝既に蕭殺の秋色を逗め、鎌倉の新蘂方に生生の春意を動かすに際して、日宗の七色、尤も宗祖の人格に饒なるを看る。今試に七色の反極を擧げむか、自尊の反は歸一主義なり、試錬の反は享樂主義なり、團結の反は個人主義なり、排他の反は世界主義なり、元氣の反は煩悶主義なり、健闘の反は平和主義なり、而して護國の反は崇外主義なり。此七者、之を今の世に覽て、果して如何の狀ぞや。今の所謂文明、所謂進歩、識者を以て自ら居り、哲人を以て他の擬する者、幾許か其れ這般七種の反色に於いて罪を日宗宗祖に獲ざるものぞ。況や夫の口、日蓮を頌して心、歸一に向ひ、筆、法華を說いて論、崇外に馳するが若きは是れ妖魔の流亞のみ。

快川火に投じて、心頭を滅却すれば火も亦涼しと道ふ、之を道はざれば火尙熱しとするか。**ソクラテス**毒を仰いで、鴆毒靈魂を滅する能はざるを說く、之を說くの自ら安んずるの要件たるか。基督十字架に刑死し、三日にして復活昇天を示す、靈のみならず肉も亦鼎鑊の以て加ふるなきを示せるか。既に之を道ひ、之を說き、之を示す、何ぞ斬らむと欲して刀戟折れ、刑せむと擬して雷電閃くの直截簡明なるに如かむや。日蓮龍口の法難、之を艶說する者、斯義を以て心と爲さば、荒誕不稽、暫く諸を不問に措いて可なり、而して試錬、元氣、健闘、亦相尋いで期すべし。若し夫れ日蓮を衣て時俗を嚇する、其輩出に於いて日蓮の時價頗る昂る、日蓮にし

て知るあらば、其笑、知らず微か、苦か、將た失か。

大正八年三月十八日

法華經要解の卷端に題す。

後學　建部遯吾

序

余今春法隆寺を過ぎり夢殿に詣うで太子正經感得の古事を讃仰し更に講筵の盛事を聯想し佛教の弘通、法華經の宣傳、其由りて來る處極めて深く極めて遠く帝國文化史上不滅の靈光を放つ所以を解す、所謂講"法華"弄"文藻"者は用語の絶倫、結構の雄大に驚き推して以て世界文學の第一となし、法華を稱へて正道を求むる者は譬諭の妙絶、思想の深遠を仰きて經典の王者となす、嗚呼法華經は實に經典の王者也、佛教渡來千有餘年羅山の一派之を抑へ時に法燈明滅隆替の事ありと雖も朝に在らざれば野に在りて佛陀の意輪、第一經典を通して善動し或は日本文化の建設となり

或は社會構成の根蔕をなす、今や憲法の保障は信教の自由を許し道を求むる者は僧俗の別なく爭ふて法華經を修せんとす、其經の偉大、其經の崇高、其經の嚴肅、其經の權威推して知るべき也。

佛典を案ずるに方便頗る多し人は以て虛誕となす而も時代思想に對する教化の方法たらずんばあらず、法華經一度出でゝ教法盡く一本に歸す、花あり實あり宛も蓮花實の爲に開き花落ちて蓮實成るが如し、幾多の經典方便多しと雖も法華經之れを結ぶに絶倫の文章を以て玄奥の哲理を致す殊に本佛顯本、機緣觸るゝ處佛陀輙ち現生し三世物を益し歡喜法悅、人をして苦難を忘れしむ、信仰なければ機感なし、人間生乎滅乎、六根を淨め、盆を撤して直に漢月を指せば大悲の意輪、常住說法、本佛我と實在す、我輩凡俗の家亦此事あり、余常に兒等に諭す、我家の祖先那由佗劫の古へに起り延長して我に及び我の延長亦子孫に及ぶ、我等に生死ありと雖も大なる我は常住不滅也と況んや本佛をや。

日本の大人格者日蓮深く法華經の神髓に入り廣く其大精神を宣傳す、立正安國の赤誠亦之れに出て國民的精神の基礎を定む、今や世界の正義を叫びて人事尙紛糾あり、人道を唱へて國際亦爭議あり、妄に人種に差別を設けて聯盟亦眞實を疑はれんとす、一切の衆生眞樂境に遊ばんと欲せば須らく祖師に倣ふて法華經の恩光に浴すべし。

能仁高師此經の眞義を示さんとし椽大の筆を揮ふて叙述懇到、徹底的理解を與へらる、人生向上の要諦、處世の妙訣、悉く收めて此中に在り、讀者克く心に讀め清遒深亮讀みて而して人生崇高の靈響に觸れよ。

大正八年三月　　岡山縣知事　笠井信一識

法華經要解

序辭……二
〔一〕法華經の位置……三
〔二〕傳來の歴史……九
〔三〕譯經の次第……一〇
〔四〕法華經の佛陀論……一五
〔五〕知識と信仰……一八
〔六〕世評の對解……二〇
〔七〕人文の準備……

妙法蓮華經序品第一

〔一〕本品の生起……二九
〔二〕題名の解釋……三一
〔三〕法華の對告衆……三三
〔四〕此土他土の六瑞……三五
〔五〕彌勒文殊の問答……三七
〔六〕一品の歸趣……四一

方便品第二

〔一〕本品の生起……四二
〔二〕題名の解釋……四五

〔三〕本品の梗概……四六
〔四〕無問の自說……五二
〔五〕權實の二智……五三
〔六〕十如實相……五五
〔七〕一會の疑惑……五九
〔八〕三止三請……六〇
〔九〕出世の本懷……六三
〔十〕說法の儀式……六八
〔十一〕要文の解釋……六九

譬諭品第三

〔一〕本品の生起……七四

〔二〕題名の解釋……七五
〔三〕舍利弗の證語……七五
〔四〕如來の述成……七六
〔五〕舍利弗の記別……七七
〔六〕衆部の歡喜……七七
〔七〕如來の解說……七八
〔八〕火宅の譬諭……八〇
〔九〕法諭の合譬……八二
〔十〕要文の解釋……八三

信解品第四

〔一〕本品の生起……九一

〔二〕題名の解釋……九一
〔三〕中根の信解……九二
〔四〕長者窮子……九三
〔五〕法諭の合譬……九九

藥草諭品第五

〔一〕本品の生起……一〇〇
〔二〕題名の解釋……一〇一
〔三〕如來の述成……一〇二
〔四〕藥草の譬諭……一〇三

授記品第六

〔一〕本品の生起……一〇六
〔二〕題名の解釋……一〇七
〔三〕邇葉の受記……一一〇
〔四〕三大聲聞の授記……一一一
〔五〕譬說の終尾……一一三

化城諭品第七

〔一〕本品の生起……一一三
〔二〕題名の解釋……一一四
〔三〕過去の因緣……一一五
〔四〕王子の覆講……一一九
〔五〕化城の譬諭……一二二

五百弟子受記品第八

〔一〕本品の生起……一二五
〔二〕題名の解釋……一二五
〔三〕默念解……一二六
〔四〕本地の顯發……一二七
〔五〕五百の記別……一二八
〔六〕繫珠の譬諭……一二九
〔七〕法諭の合譬……一三二

授學無學人記品第九

〔一〕本品の生起……一三二

〔二〕題名の解釋……一三三
〔三〕二人の請記……一三四
〔四〕阿難の授記……一三五
〔五〕羅睺羅の授記……一三六
〔六〕學無學の授記……一三七

法師品第十

〔一〕本品の生起……一三七
〔二〕題名の解釋……一三八
〔三〕五種の法師……一三九
〔四〕行人の宿善……一四一
〔五〕三說超過……一四四
〔六〕弘經の三軌……一四五
〔七〕要文の解釋……一四七

見寶塔品第十一

〔一〕本品の生起……一四九
〔二〕題名の解釋……一五〇
〔三〕寶塔の涌現……一五一
〔四〕大樂說の疑問……一五三
〔五〕釋尊の爲養……一五三
〔六〕分身の來集……一五五
〔七〕開塔の與欲……一五七
〔八〕釋尊の唱募……一六〇

〔九〕六難九易……一六二

提婆達多品第十二

〔一〕本品の生起……一六六
〔二〕題名の解釋……一六七
〔三〕提婆の成佛……一六八
〔四〕文殊の化力……一七一
〔五〕龍女の出現……一七二
〔六〕龍女の成佛……一七三

勸持品第十三

〔一〕本品の生起……一七六
〔二〕題名の解釋……一七六
〔三〕此土の弘經……一七七
〔四〕他土の弘通……一七八
〔五〕姨妃の授記……一七八
〔六〕菩薩の弘誓……一八〇
〔七〕三類の强敵……一八一

安樂行品第十四

〔一〕本品の生起……一八八
〔二〕題名の解釋……一八九
〔三〕身安樂行……一九〇
〔四〕口安樂行……一九二

〔五〕意安樂行……一九三
〔六〕誓願安行……一九三
〔七〕髻中の明珠……一九五

從地涌出品第十五

〔一〕本品の生起……一九七
〔二〕題名の解釋……一九八
〔三〕他方の弘經……一九九
〔四〕地涌の六萬……二〇三
〔五〕彌勒の疑問……二〇五
〔六〕略開近顯遠……二〇七
〔七〕動執生疑……二〇九

如來壽量品第十六

〔一〕本品の位置……二一二
〔二〕本品の神髓……二一四
〔三〕本品の生起……二一五
〔四〕題名の解釋……二一六
〔五〕本品の組織……二二一
〔六〕無比の說相……二二五
〔七〕如來の正答……二二六
〔八〕久遠の應化……二二九
〔九〕果上の應現……二三一
〔十〕形聲の二益……二三三

〔十〕六或の說示……二三五
〔十一〕一目萬影……二三六
〔十二〕六句の知見……二三九
〔十三〕所作の佛事……二四二
〔十四〕果上の妙德……二四三
〔十五〕現滅の利益……二四五
〔十六〕良醫の譬諭……二四九
〔十七〕法諭の合譬……二五一
〔十八〕譬諭の結釋……二六〇
〔十九〕偈文の要解……二六二

分別功德品第十七

〔一〕本品の生起……二八五
〔二〕題名の解釋……二八六
〔三〕功德の分別……二八六
〔四〕時衆の供養……二八九
〔五〕現在の四信……二九〇
〔六〕滅後の五品……二九四

隨喜功德品第十八

〔一〕本品の生起……三〇〇
〔二〕題名の解釋……三〇〇
〔三〕隨喜の功德……三〇三
〔四〕聞法の利益……三〇五

法師功德品第十九
〔一〕本品の生起……三〇八
〔二〕題名の解釋……三〇九
〔三〕六根清淨……三一〇
常不輕菩薩品第二十
〔一〕本品の生起……三一六
〔二〕題名の解釋……三一七
〔三〕信毀の罪福……三一八
〔四〕不輕の往事……三二一

如來人力品第二十一
〔一〕本品の生起……三二四
〔二〕題名の解釋……三二五
〔三〕十種の神力……三二六
〔四〕塔中の別付〔稱歎付囑〕……三三一
〔五〕塔中の別付〔結要付囑〕……三三二
〔六〕起塔供養……三三六
〔七〕四處の道場……三三七
〔八〕要文の解釋……三三八
囑累品第二十二

〔一〕本品の生起……三四一
〔二〕題名の解釋……三四二
〔三〕正付囑……三四三
〔四〕釋付囑……三四四
〔五〕誡付囑……三四五
〔六〕菩薩の領受……三四六
〔七〕諸佛の還土……三四八

藥王菩薩本事品第二十三

〔一〕本品の生起……三四九
〔二〕題名の解釋……三五〇
〔三〕藥王の本事……三五一

〔四〕十喩の校量……三五四
〔五〕拔苦と與樂……三五八
〔六〕要文の解釋……三六四

妙音菩薩品第二十四

〔一〕本品の生起……三六七
〔二〕題名の解釋……三六七
〔三〕世尊の放光……三六八
〔四〕妙音の來集……三七〇
〔五〕妙音の三昧……三七二
〔六〕聞品の功德……三七四

觀世音菩薩普門品第二十五

〔一〕本品の生起……三七五
〔二〕題名の解釋……三七七
〔三〕聞品の得益……三七八
〔四〕三十三身……三八一
〔五〕本品の結歸……三八二

陀羅尼品第二十六

〔一〕本品の生起……三八四
〔二〕題名の解釋……三八五
〔三〕修行の勝劣……三八六

〔四〕藥王の神呪……三八七
〔五〕二天の神呪……三八八
〔六〕羅刹の神呪……三八九
〔七〕羅刹の誓言……三九〇

妙莊嚴王本事品第二十七

〔一〕本品の生起……三九二
〔二〕題名の解釋……三九二
〔三〕二子の神變……三九四
〔四〕轉我邪心……三九六
〔五〕三種の知識……三九七
〔六〕聞品の悟道……三九八

普賢菩薩勸發品第二十八
〔一〕本品の生起……四〇〇
〔二〕題名の解釋……四〇一
〔三〕四法成就……四〇二
〔四〕普賢の誓願……四〇五
〔五〕護法の讃歎……四〇七

目次終

法華經要解

能仁事一著

序辭

國民の師表として日蓮上人の鑽仰は、歳と共に旺盛になりつゝある、この偉人日蓮上人を生んだものは、抑も何んであらうか、いふ迄もなく、法華經である、而して法華經は、釋迦牟尼一代五十年の説法の眞髓であり、七千餘卷の經典の中心である、この法華經の研究は、佛教の根本的精神を發揮し、日蓮上人の主義信仰の徹底的理解である、我等はこれに依つて、國家と人類の文明を助長し、現在及び將來に、人生々活の眞價を認むる事が能きる、斯る法

華經を世に廣めん爲に、先哲先輩が心血を注いで著述された講義註釋の類は頗る澤山のものであるが、憾むらくは多く專門的であつて、求道者の要求に滿たない嫌があるので、玆に『法華經要解』を公刊して、聊かその缺ぐる所を補はんとするのである、然し、自分等如き淺學菲才の者が勉めて通俗に極めて平易に、法華經の要義を解釋せんとするのは、甚だ越權の次第ではあるが、此の『要解』が法華經研究、日蓮主義鑽仰の一助ともなるならば、此上も無い幸であるとの考から、平素の信念に基いて、一經に對し信仰的解釋を試むるのである。

本論に入るに先逢ち、その準備として注意す可き必要なる項目數項を擧げ、少しくそれに說明を加へる事とする。

〔一〕法華經の位置

先づ第一に語らねばならぬ事は、釋迦牟尼佛一代の經典の中に於ける、法華經の位置に就いてゝある、それは已に法華經の中に、

一切の川流、江河の諸水の中に、海これ第一なるが如く、此の法華經もまた復是の如し、諸の如來の、所說の經の中に於て、最もこれ深大なり。

といひ、「諸經の中の王なり」、「これ第一、」等と宣べられてあつて、此の明確な裁判は、法華經の位置を明示して毫も疑ふ餘地が無い、海は諸川の中の王であり、法華經は諸經の中の王であつて、一代佛敎の統一歸趣の方向を示したものである、日蓮上人一代の活動は、一にこの帝王經の理想實現に外ならぬのであつた、卽ち釋迦牟尼の全精神は法華經であり、法華經の全精神は日蓮上人の宣傳する所であつた、日蓮上人曰く、

佛の御意は法華經なり、日蓮がたましゐは南無妙法蓮華經にすぎたるはなし。

〔二〕傳來の歷史

いふ迄もない事であるが、釋迦牟尼佛の當時には、文字の經典はなかつた、釋迦牟

尼佛の說法其者が、華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の經典であつて、法華經は釋迦牟尼晩年の說法で、中天竺王舍城耆闍崛山に於て說かれたものである、佛の滅後幾許もなく、堂々たる威儀を整へ、遺弟の多くは一處に會し、迦葉阿難等がその首坐と成つて、彼等が釋尊より聽き得た所を照應結集し、軈て文字に寫したものが、卽ち今日の經典である、これが佛典の結集である、法華經も斯くして結集されたものであつて、此所に一言注意して置きたいのは、經典の題名である、或は『法華經』と名づけ、或は『大日經』と名づけたのは、佛陀の名號を取り或は經典の內容に依つて命名されたものであつて、法華經の如きは、その內容に題したものである。

法華經は梵語の「薩曇芬陀利經」の譯語で委しくは「妙法蓮華經」といふのである、「經」とは契經の意味であつて、梵語には「修多羅」といひ「上は諸佛の證理に契ひ、下は一切衆生の機根に契ふ、」これが修多羅の意味である。

斯くの如く釋迦牟尼佛は、晩年にこの法華經をお說きになり、遺弟の阿羅漢達は滅後これを結集した、斯る順序を經て、經典としての法華經は今日存するに至つた、但し、この場合の法華經は、今日吾々が手にして居る如なものではなくつて、梵本の經典であつたのは勿論の事である、この梵本法華經の譯經の歷史は、後に語るであらう。

この如來の說法に就いて心得可き事は、佛陀三輪の妙化である、如來は身と口と意の三つを應用して、衆生を救濟せらるゝのである、勿論、我等の活動にもこの三つのものが適當に調節せられなければ、その目的を達することは能きぬが、釋迦牟尼佛の三輪は、果德の妙用であつて、口に四辯八音を得、身に自在の分身を應現し、意は常に大慈悲心に住して、その活動は十方三世に息む時がない、之を廣義に解すれば古來身口意の三輪は、悉く如來の說法なりとされて居る、この大慈大悲の意輪からして、如來はその口輪に於て方便敎と眞實敎とを說き、身の說法に於て眞實身と方便身とを示されて居るのである、美妙なる身を現じ給ふ時は、觀音の如な美しい姿を示し、降

魔退治の相を示しては、不動明王の身をも現ぜらるゝのである、これ實に、如來は對境に隨つて、形相を千差萬別千態萬樣に應變して、八萬法藏の經緯となし給ふのである。

【註】三輪とは、如來の身口意を轉輪聖王の『輪寶』に譬へられたのである、輪王の行列の途には、輪寶が前に廻ぐつて、道の高低險惡を一切平坦ならしむるといふ事であるが、如來の身口意の三つの働は、恰もこの輪寶の如に、一切衆生の心の邪惡を悉く救治するから、これに比べたのである。

四辯とは、法無礙辯才、義無礙辯才、辭無礙辯才、樂說無礙辯才、

八音とは、最好、柔軟、和適、尊慧、不妄、不誤、深遠、不竭、

我國佛敎の傳來の歷史は、欽明天皇の時代に始まるのである、これは公に佛敎の日本に渡來の時であるが、然し、民間にはその前既に傳來して居つた事は、史上に明かな事實である、而して今、我が日本に於ける法華經の最初の「講經」と見做す可きものは、推古天皇十四年岡本の宮に於て、聖德太子勅を奉じて講筵を張らせられた事である、次で、聖武天皇の御代に至つて、佛敎は頗る隆盛を極め、上、兩陛下の御歸依に依つて、諸國に國分寺・國分尼寺各々一を設けさせられた、殊に大なる出來事は、奈良東大寺の大佛鑄造である、これが爲に、七十三萬斤とかの銅を費やしたといふ事である、流石五丈三尺に餘る尊像は、今尙、當時の光景を語つて餘りがある、この佛敎の隆盛な時代に於て、法華經の位置は如何、法華經は實に當時の「度科」と迄なつて居たのである、度科とは僧侶となる可き試驗科目である、僧侶となる可き關門に、法華經の研究が、必須條件として科せられて居た事は、注意す可きことで、從つて當時に於ける法華經の位置を推するに足るものである、而も是が大佛の鑄造に先んずること十三年、卽ち天平六年に制定せられて居たのである。

凡そ史上に於て、佛敎の隆盛であつた時代に、法華經の顧みられなかつた時代は、曾てないのである、唯、この經が帝王經なる所以と、その權威とを認めて、この經に依て日本國の文明を建設せんとした國聖は、聖德太子傳敎大師及び日蓮上人の三大に、指を屈す可きである、法華經の位置は前述の如く、佛敎の傳來と共に、我國の思

想中心となり、信仰の源泉となつたので、平安朝を始め、傳敎大師の叡山の法華經弘通に依つて愈々法華經は隆昌に赴き、桓武天皇延歷十五年、僧勒操は、石淵に「法華八講」を修し、次いで「禁裏八講」「公卿八講」下つて「武家八講」ともなつた、歷朝中殊に、醍醐帝及び　後醍醐天皇が、法華經の信仰に御熱心であらせられた事は、事實であつて畏くも、陛下の御名は法華經の代名であつた、醍醐とは經典の示す所に依れば、佛を牛に、敎を乳に譬へて、牛の乳を益々精撰すれば、最後に最上の醍醐味を生ずる如に、佛の敎は、華嚴・阿含・方等・般若等の四十餘年の敎說を經て、最後には法華醍醐の妙經に成るといふのである、已に屢々語る所であるが、後醍醐天皇が足利の横暴を憤らせ給ふて、寶劒と法華經とを手に執らせ給ひしまゝ、吉野の行在所に崩じさせ給ひし歷史は、叡慮の程、察し奉つるも畏れある次第である。

漢學者は大體に於て、漢學の一方に傾いて排佛の傾向を持つて居るが、一代の大儒菅原道實公は、强い法華經の信仰者であつて、自から法華經を幾度となく書寫講經せられた、『菅家文草』なるものがあるが、此は法華八講の願文が、その多數を占めて居る、公の曾孫補正公は、多寶塔を建立して千部會を修し、大江匡房は一夜の中に、法華經八卷を暗誦せられたとか、當時法華經の信仰は頗る盛んなものであつた。

斯くて源平二氏の時代も、法華經の信仰は平安朝と同樣の狀態を保つて流れ、北條家の中葉、日蓮上人の出世に至つて、始めて法華經の眞實義が光顯せられたのである、而して其後は、日蓮門下の法燈の盛衰の歷史であるから此所には略する。

〔三〕譯經の次第

現在、漢譯法華經として存在する重なるものに、左の三種がある。

正法華經……法護三藏譯
妙法蓮華經……羅什三藏譯
添品法華經……闍那崛多達磨笈多共譯

尙この外に、『法華三昧經』、『薩芸芬陀利經』、『方等法華經』等を始め、一品づゝの漢譯は澤山にあつたが、現存せるものは尠くない、然し、此等の中で我國で廣く流布して居るものは、羅什三藏の譯である妙法蓮華經であつて、他は多く用ゐられて居ない。

歐譯法華經としては、七十年程前にビュルヌフ氏の『佛譯』がある、和蘭の碩學ケルン氏の『英譯法華經』は、東方聖書第二十一卷に收められて居る、和譯法華經としては、先年南條文雄博士の『梵漢對照新譯法華經』の名を以て世に公刊されたものがある。

〔四〕法華經の佛陀論

世人は法華經を研究するに當り、法華經の中にも多くの佛陀が顯はれて居て、その中心が那邊にあるか、殆ど統一、中心の佛陀を看出すに困難を感ずるであらう、この

經驗は獨り法華經研究にのみ存するのではなくつて、由來、佛陀論は佛教全體の大問題である。

基督教の如く、徹頭徹尾、一神を標榜して顯はれた教義では、その中心の實在者を認めるには、さしたる困難を感じない、その經典を手に把つて、基督教を多神教とみる者は恐らく一人もあるまい、慥かに一神教であるに相違ない、然し、佛教に在つては、佛陀論を決定する事は容易でない、この困難な佛陀論に、最後の說明を與へるものは法華經である、佛教が多岐多樣な教義を生み、一見して散漫なる佛陀を生んだ事も、法華經より飜へつてこれを觀察するならば、一切の經々は法華經の統一的大教義と、本佛釋迦牟尼の現はれ給ふ可き前提であつた事を、合點せらるゝであらう、であるから、法華經の佛陀觀に徹底しないならば、佛教を研究して佛陀觀に彷徨ふ結果、冷灰にも等しい眞如論を捉へて、佛陀とはこの眞如の理體に名付けた名に過ぎないなどゝ、いふに至るであらう、斯る人は佛教の學びそこねであつて、斯る佛陀は哲

學者の神ではあらうが佛敎の佛陀ではない、殊に法華經壽量品の佛陀は左樣なものではない、佛陀とは眞如の理體に名付けた名に過ぎぬとするならば、大慈大悲の發動も、遂に出づるに由なき事となり終るであらう。

法華經壽量品は、これ等の難關に一道の光明を點じ、佛陀論の解決を告げたものである、壽量品に「然るに善男子、我れ成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由陀劫なり、」と仰せられた一句は、久遠已來の時間、空間を綜べ、雜然として存する、根なし草の波の上に浮べる諸佛の活動に、その中心と根蔕とを與へ、而して無限の佛力を統一する一大本佛の現はれであつた、斯くの如くにして佛敎は、多神敎より統一神敎に歩を移して、世界の宗敎の覇王となり、本佛釋迦牟尼の光明は、永久に衆生の迷闇を照破して滅する時がない。

法華經已前の經典に於ては、本佛釋迦牟尼の衆德が、未來救濟の佛となつては阿彌陀佛となり、現在の救濟には藥師如來となり、乃至、智慧の結晶としては大日如來となつて、衆生の迷霧を照したのであつた、然し、法華經壽量品の本佛が光顯された以上は、是等の衆德は一大本佛の包攝し給ふ所であつて、日輪の光明の諸星の光を攝むるの譬は、事實となつて顯はれて來た、曾て水戸光圀公の疑問に對し、名僧日華上人が、

藥師大日或彌陀　十方三世幾百千
畢竟如何諸佛體　靈山一月影萬川

と答へたのは、寔に壽量品の意であり、日蓮上人の『開目鈔』の精神であつた、開目鈔は釋迦牟尼中心の佛陀論を高調して、佛敎の統一を力說された上人畢生の大著作である、この疑問は、啻に光圀公のみの疑問として、輕々しく看過することは能きない、佛典の中に錯雜して說かれた諸佛の中心は、靈山の一月が、其の影を萬水に宿すが如くに、無限の分身は、無始久遠の本佛釋迦牟尼に統一されて居るのである、日華上人のこの一偈に、光圀公の疑念は氷解して、豁然大悟、爾來公は、壽量品のこの意

を國家の上に移し、堂々として勤王の大義を主張されたとの事である。

斯る意味に於て、彌陀も藥師も大日も佛であるには相違ないが、釋迦牟尼佛とはその趣を大に異にして居つて、釋尊こそ眞に人格實在の佛である、釋尊は史上に一代の歴史を留めて居らるゝ佛陀であつて、而も常住不滅の本佛である、弘法・法然・親鸞なんどに依て、太日が釋尊の頭を押へ彌陀が釋尊の頭を履む如になつたのは、彼等が全く法華經の佛陀觀に迷ふた結果である、「法華經を讀むと雖も、還つて法華の心を死す」といふ傳敎大師の言があるが、法華經を見て釋迦牟尼中心の佛陀觀に到るを得ず、却つて法華經を以て、阿彌陀佛や大日如來の效能書の如に曲解するのは、所謂、法華經の心を死すものである、廣く佛敎研究者の心す可き事ではないか。

凡そ如何なる事でも、一事一物を研究するに當つて大切な事は、その土臺となる可き基礎概念を判然と握つて取掛る事である、今、法華經の研究に、佛陀とは釋迦牟尼佛これなり、と前提して置いて、研究の結果が之の前提を僞はらなかつたならば、その研究は誤なきものである。

勿論、釋迦牟尼の衆德は、無限にこれを列擧することか能きるけれども、是を哲學的に觀れば眞理の結晶であり、是を道義的に觀れば完全人格となり、宗敎の本尊としては大慈大悲の救主となるのである、倫理哲學宗敎の上に表はれる三德を、一身の上に現はされた一大人格者は、實に我が釋迦牟尼佛である、釋尊は大日であり、知導者であり、大良醫である、而して、一切衆生に圓滿なる生活を與へんが爲に　人類の社會に出現せられたのであつた。

〔五〕　智識と信仰

智識と信仰、換言すれば智行及び信行の爭鬪は、宗敎には古よりの重大な事件であつて、釋迦牟尼佛の出世は、印度に於けるこの爭鬪に、明確な解決を與へられた、然し、法華經已前の佛敎各宗の敎義に在ては、未だこの問題に就いて圓滿な說明を聞く

ことか能きない、或は智識に重きを置いては、智行一方に傾いた天台の如きものとなり、或は智識の尊重を忘れて甚だしきは、これを往生の障りとして專念の修行を勸め、遂には難行道易行道の簡單な標準に據て、信智の兩斷を試みたるが如き、多くは信智の統一調和を忘れた風がある、これに反して法華經は、遺憾無く信智の二行を調整して居る、日蓮上人が「智者に我が義破られずば須ゐじとなり」と仰せられたのは、上人の信仰が如何に堅固に、信智を一體として築き上げられたものであるかを、窺ふ事が能きる。

宗教の信仰に必要な過去・現在・未來の三世觀も、法華經の教ゆる所は至つて明瞭である、法華經に依て得る未來觀は、純他力信仰門に於けるそれとは、其趣を異にして居つて、佛陀の出世が衆生救濟に存する以上、未だ救はれざる現在迷中の衆生をして、その希望を未來に置かしむるのは當然の事であるが、然し、純未來教が說くが如き未來でない。

既に三世なるものが、我の生活の限りなき時間の連續を分類したものであつて、現在より見た將來の時間を未來といひ、既に過ぎ去つた時間を過去といふとするならば、過去は經過した現在であり、未來は將に來たる可き現在であつて、現在を離れて單なる未來も過去もあり得可き理由はない、斯くして三世は實に一世であり、一世は又實に三世であらねばならぬ、而して生けるこの現在を中心に、佛陀の救濟、我の悟りを語るのが法華經の三世觀である、であるから、所謂、未來教の如き未來觀は、我我の理性と相容れざると同時に、現在に在つて救はれざるものが、唯、單に來來に於て救はるゝといふ事も、到底、解することの能きない事柄である、固より唯現在のみを知つて、過去と未來を知らぬ俗見に同意せぬのは、論ずる迄もないが、法華經は期くして、現在と未來とを一貫し、世間の樂及び涅槃の樂を與へんとして說かれたものである、日蓮上人曰く、

先づ生前を安んじて、更に沒後を扶けん。

〔六〕世評の對解

由來、法華經といへば、直ちに法華宗の經典、日蓮宗の依經であると思ふと共に、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗罵倒なんといふ先入觀念を、同時に頭の一角に喚起するやうな傾向があるが、これ等は未だ法華經の何たるかを解せざる人の考である、少けなくも法華經を解せんとするには、虛心坦懷、公明正大な心地に住しなければならん、法華經は佛敎の所說であつて人類の寶典の中の寶典である、との信念から出發しないでは、法華經の法華經たる所以を了解する事は能きない、法華經の主義は統一主義である、統一主義は單なる獨一主義、獨尊主義、排他主義ではない、眞の包容主義であつて、他を排斥する代りに、彼が有する一分の妙旨を發揮して、夫れに生命を賦與せんとするものである、禪念佛眞言律等は、一大佛敎の一部分であつて、全體ではない、大なる宗敎は大なる眞理の各面を有するもので、一見、雜然として統一を缺いだ如に思はれる佛敎も、必ずや、統一歸趣のある筈で、法華經は佛敎全體にこの統一歸趣を與ふるものである、我が大なる佛敎發展の道程に、幾多の疑問の存するのは當然であつて、釋尊一佛の所說が、斯くも多岐多端であるとは一往驚かれもしやうが、研究者の頭腦が統一的に出來上るならば、其所に秩序整然たる統一を看出し得るもので、實に法華經は一大佛敎の中心、而してその枝葉は、開いて五千七千卷の經典となつて居るので、卽ち、「皮膚毛細は出で、衆典に有り」とはこれである、法華經は大綱を語つて、その毛細を語らず、餘經は毛細を敎へて、大綱を敎へぬ、禪を語り、律を具し、念佛を包み、眞言を容れ、是等の各部分を開顯統一して、大藏全體を結束し、佛敎を一個の大なる有機體として、活動を起さしむるものが、法華經である、玆に於て、法華經を研究せんとするものは、須らく先づ、その先入の固陋偏見を捨てゝ、正直に經典の指導を辿らねばならぬ。

〔七〕入文の準備

法華經二十八品の各品に就いて、その一々を要解する前に、今一つ注意を要するのは、序・正・流通の三段てふ事である、古來、學者が經典を講ずる場合には、常に一經を序正流通の三段に別つて講じたものである、この序正流通の三段とは、序は序說段といふて序論、正は正說段といふて本論、流通は流通段といふて結論とも稱す可きものである、而してこの序正流通の三段に就て、釋尊一代五十年の全經典には「一代三段」無量義經・法華經・勸普賢經の三部には「十卷三段」法華經一部には「一經三段」迹門十四品には「迹門三段」本門十四品には「本門三段」等と立てるのである、此等の一代三段、及び十卷三段は、この法華經要解に大した必要を認めないから、一經三段と本迹二門の三段のみを、次に圖解する。

- 序分……序品第一
- 迹門三段
  - 正宗……
    - 方便品第二
    - 譬喩品第三
    - 信解品第四
    - 藥草喩品第五
    - 授記品第六
    - 化城喩品第七
    - 五百弟子受記品第八
    - 授學無學人記品第九
    - 法師品第十
    - 見寶塔品第十一
  - 流通……
    - 提婆達多品第十二
    - 勸持品第十三
    - 安樂行品第十四
  - 序分……從地涌出品第十五

第一卷　第二卷　第三卷　第四卷　第五卷

- 本門三段
  - 正宗
    - 如來壽量品第十六
    - 分別功德品第十七
    - 隨喜功德品第十八
    - 法師功德品第十九
    - 常不輕菩薩品第二十
    - 如來神力品第二十一
    - 囑累品第二十二
    - 藥王菩薩本事品第二十三
    - 妙音菩薩品第二十四
    - 觀世音菩薩普門品第二十五
    - 陀羅尼品第二十六
    - 妙莊嚴王本事品第二十七
    - 普賢菩薩勸發品第二十八
  - 流通
- 迹門三
  - 序分
  - 正宗
  - 流通

第六卷

第七卷

第八卷

- 段
  - 流通
- 本門三段
  - 序分
  - 正宗
  - 流通
- 經三段
  - 正宗
  - 流通

上の圖示では、僅かに序正流通の字義を解する位のものであらうが、更にこれに一々の科段を付して法華經全體を仔細に講述するのは、專門の事であるから、上の圖で法華經の序正流通の大樣を了解さるゝならば、それで充分である。

次に、法華經の二十八品は如何なる結構を以て、成立して居るのか、その體裁の大體を知るの便宜上、茲に各品の要義を摘んで記述する事とする。

序品第一、釋尊靈鷲山に於て無量義經を說き終らせ給ふや、此土・他土に六瑞相が現はれた、これを見た靈山一會の大衆は、何の故なるかを疑ひ、慈者の彌勒菩薩は一會を代表して、智者の文殊菩薩に瑞相の所以を問ふた、文殊は、過去の世に日月燈

明佛の時、正しくこれと同一の瑞相があつたが、やがて燈明佛は妙法蓮華經を說かせられたから、定めし今の釋迦牟尼佛も、當に法華經を說かせ給はんが爲であらうと答へた。

方便品第二、無問自說とて、釋尊は誰人の問もなきに、大禪定より起ち、智慧第一の舍利弗を對告衆として、諸佛の智慧は諸法の實相を究め盡せる由を告げられた、次で舍利弗の懇請を容れて、開三顯一を說き、「四佛知見」を示し、これが出世の一大事因緣であり、前權後實は、諸佛說法の儀式である由を明された。

譬諭品第三、上根の舍利弗は、開三顯一、四佛知見を聽聞して佛智漸く開け、疑惑を斷じて華光如來と當來成佛の記別を授けられた、然し、如來は中智中根の大迦葉、迦旃延、目健連、須菩提の四大聲聞の爲に、開三顯一の理を、更に「三車大車の譬」を以て說かせられた。

信解品第四、三車大車の譬を聽いた四大聲聞は、「長者窮子の譬」を以て、佛意の領解を白上げた。

藥草品第五、すると釋尊は、「三草二木の譬」を以て、四大聲聞の領解を、誤りなしと證明された。

授記品第六、佛慧を解した四大聲聞に、當來の成佛を許し、親しく釋尊の授記があつた。

化城品第七、釋尊が下根下智の人々に、大通智勝佛の時の十六王子の因緣を、「三千塵點劫の譬」に寄せて語り、重ねて「化城寶處の譬」を以て開三顯一を諭された。

弟子品第八、釋尊は富樓那尊者を首め、五百の弟子、並に千二百の阿羅漢に授記せられた、時に五百の聲聞は「衣裏繫珠の譬」に依て、佛意を領解した。

人記品第九、待者阿難、佛子羅喉羅の本來を語つて授記せられ、及び總じて下根の聲聞に授記し給ふ。

法師品第十、五種の法師、十種の供養を說いて、法華經の一偈一句の持經の功德を稱

へ、法華經の已今當三說超過を明して、弘經の三軌を示さる。

寶塔品第十一、この時、多寶の佛塔靈山に湧現し、塔中に多寶如來が、皆是眞實と證明し給へば、釋尊は三箇の告勅を以て滅後弘經の人を召さる。

提婆品第十二、釋尊は二箇の諫曉、卽ち提婆惡人の成佛と龍女女人の成佛を告げて、廣く弘經を勸めらる。

勸持品第十三、二萬の菩薩は此土の弘經を、諸大聲聞は他土の弘經を願ひ、又、諸尼授記せられて他土の弘經を誓ふ、爾時に、八十萬億那由佗の菩薩は、二十行の偈を宣べて此土の弘經を誓願した。

安樂行品第十四、身・口・意・誓願の四安樂行を守つて正像の弘經を勸め、「髻中明珠の譬」を以て、法華經の經王たる所以を示された。【以上迹門十四品】

涌出品第十五、過八恒沙の菩薩の弘經を止め、本化地涌の大菩薩達を召出さる、彌勒を首め一會の大衆は、地涌の菩薩の涌現の所以を疑ふに至つた。

壽量品第十六、於茲乎、釋尊は、彌勒不知の疑問に答へて久遠實成を顯はし、出世の大事を語られた、次で「良醫の譬」を說いて每自作是念の大慈悲を語らる。

分別功德品第十七、佛壽長遠を聽いた無量の衆生は、皆夫れ〳〵に得益受記し、釋尊は現在の四信と滅後の五品を擧げて、法華經信仰の功德を分別さる。

隨喜品第十八、重ねて五十轉展隨喜の功德は、八十年の布施に勝る由を諭された。

法師功德品第十九、五種の法師が、法華經を修行して得る、六根淸淨の功德を述べらる。

不輕品第二十、不輕菩薩の往事を說いて、折伏弘經を勵まさる。

神力品第二十一、斯くして釋尊は、十大神力を現じ、結要四句の要法を、本化上行菩薩に別付囑し、末法の弘經を委ねられた。

囑累品第二十二、總じて迹化の菩薩衆に、この法華經を摩頂付囑し正像二時の弘經を囑せられて付囑は終つた。

藥王品第二十三、宿王華菩薩の問に、釋尊藥王の本事を明して、身輕法量死身弘法の節を敎へ、「十喩の校量」を以て法華經の位置を定められた。

妙音品第二十四、東方淨華宿王智如來の所より、妙音菩薩靈山に參詣す、釋尊妙音の三十四身を現じ、衆生を利益する旨を衆に語らる。

普門品第二十五、無盡意菩薩の問に應じて、觀世音の七難・三毒・二求の利益を說き、三十三身の普門示現を歎ぜらる。

陀羅尼品第二十六、五番の善神は、神呪を以て法華經の行者の守護を誓願した。

嚴王品第二十七、釋尊妙莊嚴王の本事を語り、三善智識の大事を說かる。

勸發品第二十八、普賢菩薩東方寶威德上王佛の國より來つて釋尊に再演法華を請ふ、釋尊・四法成就を以て之に答へ給ふ、普賢神呪を以て持經者の守護を誓願す。【以上本門十四品】

妙法蓮華經序品第一

〔一〕本品の生起

釋迦牟尼佛は成道の後、四十餘年の永きに亙つて、華嚴・阿含・方等・般若の經々を說かせられたが、未だ如來出世の大事を宣べ給はなかつた、無量義經に於て、四十餘年の散說は、一法より生づる旨を示し、

佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに、宣說す可からず、所以者何ん、諸の衆生性欲不同なることを知れり、性欲不同なれば種々に法を說き、種々に法を說くこと、方便力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯さず、是の故に衆生の得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず、

と仰せられて、將に法華一乘の宣說を、豫め告げ知らしめられた。

無量義經の經旨は、「一從り多を出し、多從り一に歸る、」といつて、如來の說法は、一妙法より無量義を演繹し、又無量義は一妙法に歸納さる可きものである事を、敎へられたのである、恰も、一代五十年の說法は、一本の喬木に譬へる事が能きる、千枝萬葉は一の根幹より發生して居ると同樣に、多岐多端に分れて居ても、一代佛敎の無量義は、妙法の一法より生じ、七千八千の經々は、法華の一經に攝まつて居るのである、法華經の開經たる無量義經は、日蓮上人が、

此法華經の始に、無量義經と申す經おはします、譬へば大王の行幸の御時、將軍前陣して狼藉をしづむるが如し、その無量義經に云く、四十餘年未顯眞實等云々、此は將軍が大王に敵するものを、大弓を以て射はらひ、又太刀を以て切りすつるが如し、華嚴經の華嚴宗、阿含經の律僧等、觀經の念佛者等、大日經の眞言師等の者共が、法華經に隨はぬを、せめなびかす利劍なり、勅宣なり、

と記された如に、法華經の前驅をなすものであつて、無量義は一法より出づと、法華經の宣說を前提せられたものである、日蓮上人の、

月の將に出でんとして、その體、東山にかくれて光西山に及べども、諸人、月の體をみざるが如し、

の一句に依つて、よく言ひ盡されて居る、この一法の顯說こそ、實に如來出世の大事であつて、その一法は方便品よりして、釋尊の金口に梵音の御聲となるのであるから、この靈山會上、法華說會の雄大にして莊嚴な光景を、一會の大衆に想見せしめんとして、叙せられたものが、序品の一品で、これが本品の生起である。

〔二〕題名の解釋

「序」とは順序のことで、物の起る次第順序である、本品は法華經一部の序幕なるが故に、譯者はこれに名づけて序品と記したのである。

凡そ一切の經典には、往に述べた如く、序、正、流通といふことがあつて、何れの

經典も皆整然たる順序を以て、演說せられてある、序は序論、正は本論、流通は結論である、法華經は、啻に敎理が超勝せるのみではない、この序正流通の順序を、最もよく調へてある事も、多くの經典中に冠絕して居る、今本品は、法華經二十八品の最初であつて、序論と見る可きものであるから、序品といふのである、而して「品」とは、一章二章の「章」と見て差閊はない。

次に、序を別つて通、別の二つにする、通序とは、何れの經典にも通じて用ゐられる序の形式であつて、別序とは、この法華經にのみ獨特の形式である、固より序品にもこの二つのものがある、今本文に入つて、

如是、我聞、一時、佛、住王舍城耆闍崛山中、與大比丘衆萬二千人俱、

といふ風に六通りのものが、擧げられてあつて、これを通序といつて、何れの經典にもこの形式は具へられて居る、法華經に於ては、結集の時、阿難尊者が、自己の自信を發表して「如是」といひ、聽者を代表して「我聞」といひ、釋尊五十年の說法中この法華經は、後八年の說時である事を「一時」といひ、說かれた主は釋迦牟尼佛なる事を「佛」といひ、「處」は王舍城の耆闍崛山中卽ち靈鷲山であつて、一會の聽衆は、「大比丘衆萬二千人」を始め、其他の者共であつた、と記されたのである。

別序は、序品の中に於て起る出來事が、法華經の宣說を前提するので、他經と異なる事柄であるから、法華經のみに限られるのである。

〔三〕法華の對告衆

抑もこの法華經は、何者を相手としての說法であつたか、彼の阿彌陀經の如きは、不遇の一婦人を慰安せんとして說かれたもので、乃ち不孝の子の爲に、夫は幽閉せられ、夫人も將に同じ憂目を見んとして、悲泣の極、厭世の念抑へ難き場合に當つて、釋尊に哀訴したので、如來はその慰安の爲に說かれたものである、この聽手の如何に由つて、說かれた經典の價値も、察知する事の能きるものであるが、法華經の對告衆

は、阿彌陀經のそれの如きものではない、經文に列せられてある對告衆は、一に聲聞衆として、生れながらに物知る如き敏き人々、二に菩薩衆として、慈悲の爲には水火を物ともせぬ立派な君子人、三に天上界として、天の神々、四に二界八番の雜衆として、異形の類まで皆來り集まつて、法座に在つた、實に法華經は、一機一緣の爲の說法でなく、上は菩薩から下は地獄に至る迄、神も來會し人も來會し、一切の衆生を網羅して說かれた大說法であつたのである、而してその中心が、人間にあつた事は、重大な意味合を含んで居るので、この一事を以てしても、法華經の目的が、生ける人類社會の救濟にあつた事を、窺ひ知る事が能きる、日蓮上人曰く、

大覺世尊も、五戒を持ち給へる故に、淨飯王の宮に生れ給へり、諸の法身の大士、善財童子、文殊師利、舍利弗、目連も皆天竺の婆羅門の家に生れて、佛の化儀を助けんとて、皆人の形にて御座しき、梵天帝釋の天衆たるも、龍神修羅の惡道の身も、法華經の座にしては、皆人身たりき。

〔四〕　此土他土の六瑞

凡そ世間の出來事でも、大小に拘らず必ず瑞兆のあるものである、まして廣大なる法華經の說法には、甚深な神秘を藏した大瑞兆がなくてはならん、この祕深の瑞相を、序品の此土他土の六瑞といふのである、正しくこれから一品の終までが、法華經の別序である、先づ此土の六瑞に就いて名稱を擧げるならば、

一、說法瑞、二、入定瑞、三、雨華瑞、四、地動瑞、五、心喜瑞、六、放光瑞、

である。

一、說法瑞とは、釋迦牟尼佛が、無量義經の說法を遊ばされた光景をいふので、「四十餘年未レ顯二眞實一」の大說法である、

二、入定瑞とは、無量義經を說き終らせられて、三昧に入らせ給ひ、身心不動とあるから、いと安詳にあらせられた光景で、

三、雨華瑞とは、說法入定の二瑞相に連れて、天より美はしい赤色の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華の華繽紛として下り、加へて麗しい白色の曼殊沙華、摩訶曼殊沙華の華は、六花の如く雨りしきりつ、如來の寶座と靈山一會の大衆の前に、散り布いた、

四、地動瑞とは、前の雨華瑞とは天の感應であり、これは地の感應である、地動は六種震動といつて、動——大地左右に動く、起——大地上下に動く、踊——大地上下左右前後に一時に動く——の三動に伴ふて、震・吼・擊の微妙な音響が起るのである、この現象、この瑞相は、一見奇異の感があるやうではあるが、熟考するならば、成程と合點する事が能きる、人々は、この地動瑞によつて、恰も搖籃の中の赤子の如に、身心に安靜な快感を與へられたのである、

五、心喜瑞とは、上の四瑞相に依て、靈山一會の大衆は、譬へん方もなき歡喜の心に充ち、一心に合掌して如來を見奉つた、心喜瑞は又衆喜瑞ともいふ、

六、放光瑞とは、今や釋尊は、靈山一會の大衆の、歡喜合掌の相を見そなはして、眉間白毫の光を放ち給はれた、經には、

爾の時に佛、眉間白毫相の光を放ちて、東方萬八千の世界を照したまふに、周徧せざることなし、下、阿鼻地獄に至り、上、阿迦尼吒天に至る、

とある、眉間白毫相は、佛の三十二相の一つであつて、眉間に白瑠璃の如き白毛があつて、光を放つのであるが、これは如來の智德を表はすのである、この放光瑞は、六瑞相中第一に大事な瑞相であつて、前五瑞相は、謂はゞこの放光瑞の瑞相である、凡そ如何なる宗敎も、光明を尊ばぬものはない、殊に法華經は、一入光明を尊重する、寔にこの放光瑞の光明が、法華一經を喚起したのだといつても、敢て差閊はなからう、此の光明は、佛身の不思議力を表はす丈でなく、實に佛智其者であるのである。

以上の六瑞相を纏めていふならば、天地宇宙の眞・善・美の極致を表示したものである。

次に他土の六瑞の名稱を列するならば、

一、見六趣瑞、二、見諸佛瑞、三、『諸佛說法瑞、四、見四衆說法瑞、五、見菩薩所行瑞、六、見佛涅槃瑞、

である、此等の一々に就き、說明する事は措いて、唯この六瑞相の起つた深意をいふならば、釋尊の大慈悲が發動して、不可思議の佛智は、眉間白毫相の光となつて東方萬八千の世界を照らし、靈山の大衆をして、彼の土に於ける迷悟・苦樂・修行・得道・得果の光景を、親しく見聞せしめ、我等も今、釋尊に從ひ奉つて法華經に依り、離苦得樂の菩提を成就したいものとの大決心を、促がさしめられた誠に尊い佛意が、この中に含まれて居るのである。

斯の如くにして、此土他土合せて十二の瑞相は、實は放光瑞が中心であつて、『正法華經』にこの序品を「光瑞品」と稱へたのも故あることである。

〔五〕彌勒文殊の問答

この此土他土の大瑞相を見聞して、彌勒菩薩は、釋尊が斯る未曾有の大瑞相を現じ給ふのは、抑も何が故であらうか、時しもあれ、集まれる靈山の大衆も殘りなく、この稀有の瑞相に疑念を起して、その因緣を知らんとして居るので、慈者の彌勒菩薩は、大衆の念を忖度し、我と人との疑を晴さんものと、智者の文殊菩薩に向つて、釋尊が斯くも稀有の大瑞相を現はされるには、定めし大なる意味のあることであらう、と問を掛けたのである。

すると茲に於て、文殊菩薩はいとも懇ろに、彌勒菩薩の問に答へて言く、

我が惟忖するが如き、今佛世尊、大法を說き、大法の雨を雨し、大法の螺を吹き、大法の鼓を擊ち、大法の義を演べんと欲すらん、

と、斯く申すのは過去遠々の大昔、日月燈明佛と申す佛があつた、此佛已來、二百萬の佛は皆同樣に、日月燈明佛と名乘つて居られたが、その最後の日月燈明佛は、未だ出家前に於て、八人の御子を有つてあらせられた、この御子達は、父の成佛を聞いて、

八人ながら揃つて出家遊ばされた。

さてこの日月燈明佛が、大乘經の「無量義敎菩薩法佛所護念」と名づくる經を說き終つて、無量義處三昧に入らせられたが、其時天よりは四種の華雨り、丁度今ある通りの瑞相一つも缺ぐることなく、この瑞相の後、日月燈明佛は、御弟子の妙光菩薩を對告衆として、「妙法蓮華經」を演說法遊ばされた、この說法の御座は、實に六十小劫といふ長い々々間であつたにも拘らず、一會の聽衆は食頃といつて、食事の間程にしか思はなかつた、尤もこれは、佛の神通力によつて斯くあつたのであるが、それと共に法華經を聽くことの愉快の餘り、身心共に些の懈怠をも覺えなかつた、斯くして日月燈明佛は涅槃し給ふたが、御子達八人は、共に妙光菩薩に仕へて成佛遊ばされた今この日月燈明佛の往事に照し合せて、この大瑞相の因緣を考へて見るに、今の釋迦牟尼佛も、正に妙法蓮華經を說き給はん爲めに、この大奇瑞を現はし給ふたものと、我は惟忖し奉つる、汝等も我れと共に、一心に如來が妙法蓮華經を說き給ふて、我等に一味平等の法雨を雨らし給ふを待たれよ、と文殊菩薩は彌勒菩薩の問に、答へられたのである。

〔六〕一品の歸趣

抑も法華經が、大藏全典の眞髓であり、眼目である事は、一經の序文たる序品の一品にも窺はれる。

先づ靈山の一會には、人類を中心として、神も菩薩も其他一切の大衆を網羅し、威整ひ儀備はつて、玆に一會の大衆は、慇懃鄭重に釋尊を供養し讃歎し、釋尊は權實榜示の無量義經を說いて、說法瑞を現ぜられ、次で此土他土の六瑞相が現はれた。

この大瑞相を見て、奇異の感に打たれた慈者の彌勒は、衆疑に代つて智者の文殊に、その因緣を問ふた、智者の文殊は、日月燈明佛の往事に寄せて、今の釋迦牟尼佛も、亦、妙法蓮華經を說かせらるゝのであらうと、佛の御心を忖度してこれに答へ

た。

今や一會の大衆は、大旱の雲霓を望むが如く、釋尊の金口が如何に開かるゝか、人人の渴仰戀慕の情は、轉た、吾等が想像の外にある、日蓮上人曰く、

佛の御年七十二、成道より已來四十二年と申せしに、靈山にましまして無量義處三昧に入り給ひし時、文殊彌勒の問答に、過去の日月燈明佛の例を引て、我見燈明佛乃至欲說法華經と先例を引きたりし時こそ、南閻浮提の衆生は法華經の御名をば聞初たり。

方便品第二

〔一〕本品の生起

昔から法華經ほど解し難い經典はない、といつて居るが、眞にその通りである、一代佛敎の肝要、幽玄な宇宙の眞理を說示した經典であるから、さもある可き筈だと思ふ、然し我等は、信仰の德に依つて、難解入のこの法華經の妙理を、體得する事が能きるのである。

法華經は、二大部門に別れて居つて、前を迹門――序品より安樂行品に至る十四品――といひ、後を本門――涌出品より勸發品に至る十四品――といふ、印度降誕の釋尊が、假りに生滅を示し、常住不滅の實在者であることを習し秘せらるゝのが迹門であつて、衆生濟度の上にこそ生滅を示すものゝ、實は常住不滅の實在者である事を明さるゝのが本門である、而して迹門の肝要は、「在顯實相」といつて、哲學の第一義を語り、本門の肝要は、「顯壽長遠」といつて、宗敎の第一義を語るのであつて、この二箇の大事が、「迹門の十妙」「本門の十妙」ともなつて、卓越せる法華經の敎理を構成するのである、この本迹の十妙を細に語る事は、餘りに專門的であるから、茲には研究者の注意迄に、唯、名稱のみを擧げて置く事とする。

迹門十妙

一、境妙、二、智妙、三、行妙、四、位妙、五、三法妙、六、感應妙、七、神通妙、八、說法妙、九、眷屬妙、十、利益妙、

本門十妙

一、本因妙、二、本果妙、三、本國土妙、四、本感應妙、五、本神通妙、六、本說法妙、七、本眷屬妙、八、本涅般妙、九、本壽命妙、十、本利益妙。

而して方便品は、迹門十四品の骨目であつて、法華經の哲學的基礎は、こゝに成立つのである、この大事な方便品は、如何にして生起したのか、序品の十二の瑞相に驚いた靈山一會の大衆は、文殊彌勒の問答に、釋迦年尼佛が、將に出世の大事を宣說せられんとするのである事を知つて、恰も大旱に雲霓を待つが如く、今や遲しと耳を傾けて、佛の說法を待ち受けて居た、時は至りぬ、釋尊は無問自說として、誰人の問もなく、尋もないのに、安詳に無量義處三昧より身を起して、一乘法華の大法、一化の始終を示さんと、口輪はこゝに振ひ、智惠第一の舍利弗は、擇ばれてその對告衆となつて、方便の門は開かれ、眞實の相は玆に顯示さるゝのである。

【註】無量義處三昧とは、釋尊が法華經を說かれるに先逢つて、入らせ給ふた禪定の名である、三昧は・調・直・正と譯す、『大論』に、「善心一處に住して動ぜず、是を三昧と名づく、」と、

〔二〕題名の解釋

虛妄も方便といふ諺があるが、決して左樣なものではない、「方便」とは暫く用ゐて後に捨つるの義で、例へば家を建てるに就いて、一應足代を拵へるやうなものである。

方便に「能通方便」「法用方便」「秘妙方便」の三がある、能通方便とは、方便は門なり、門は能通を義として、方便の門を開いて眞實の相を示すをいひ、法用方便とは、方は法、便は用で、衆生を引導する種々なる如來の方法をいひ、この二つの方便は何れの經典にも用ゐられてある、秘妙方便とは、方は秘、便は妙で、法華經已前の經々

に於て、我等が佛子であることを明さないのが秘で、今、一切衆生は悉く佛子なりと示すのが妙で、この方便は獨り法華經に限ぎられたものなのである。本品は正しくこの秘妙方便を說かれるので、方便品と名付けられたのである。

〔三〕本品の梗概

曩にいつた如に、方便品は迹門十四品の中で、最重要な經文であつて、從つて種々と澤山に重要な敎義が錯綜して居るから、其等の一々に就いて要解を試むるに先達ち、先づ概念を得る爲に、一品結構の梗概を一言する必要があると思ふ。

釋尊出世の本懷、一乘法華の妙法が顯說さる可き時は正に純熟した、靈山一會の大衆は、片唾を呑んで、釋尊の口輪の說法を、今や遲しと待ち構へて居る。

爾時世尊は、ヤヲラ安詳と身を無量義處三昧より起し給ふて、十大弟子中智慧第一の舍利弗を呼んで、汝舍利弗よ、三世——過去現在未來の世——十方——上下四方——の諸佛の智慧といひ、又、我れ釋迦牟尼の智慧といひ、究竟の佛智は、汝等小乘の徒の、到底も窺ひ知る事の能きない所であるぞよ、と一大疑問を提起せられた、何故かとならば、一切の衆生を救濟する佛の智慧は、廣大深遠であつて、一切未曾有の法を悉く成就して居る。小乘の悟りに滿足して居る聲聞緣覺なんどの徒の、夢想をだに許さぬ幽玄なものである、止みなん舍利弗よ、また說く可からず、唯、佛と佛とのみよくその奧底を究め盡くして居る、天地宇宙の哲理、諸法實相の妙理は、汝等の智慧を超越して居つて、今更、說くも詮ない事であるから、思ひ止まるの外はあるまい、所謂、諸法の如是相・如是性・如是體・如是力・如是作・如是因・如是緣・如是果・如是報・如是本末究竟等と、彼の有名な十如是を示して、諸法實相の妙理に體達せる如來の智慧の、幽遠玄妙なることを、繰り返し繰り返しつつ、讚歎遊ばされた。

そこで一會の大衆は、怪訝の念禁じ難く、阿若憍陳如以下千二百の阿羅漢達は、我等は、釋尊成道の昔から、世尊に隨順してその說法に信伏し、阿羅漢の悟りまで得て

居るが、今日斯く仰せらるゝを聞いては、佛意の程を推量し難い、前が虚妄か、今が虚僞なのか、と深い疑の雲に閉された。

茲に於て舍利弗は、人々の疑念と自己の疑惑を除かん爲に、大衆に代つて、釋尊の說法の前後に月鼈の相違あるを怪かりながら、何故に世尊は、今更、諸佛の智慧の深遠廣大なるを歎じ、所有の祕法を稱へ給ふのであるか、願くば我等の怪疑を去らしめ給へと、慇懃に請ひ奉つた。

然るに釋尊は、止みなん舍利佛！　と三度その請を制止せられたが、舍利弗の叮重なる重ねて又重ねての三度の請に、今は默し難くて、

汝已に懃慇に三たび請じつ、豈說かざることを得んや、汝今、諦らかに聽き、善く之を思念せよ、吾當に、汝が爲に分別し解說す可し、

出でや、出世の本懷を語らんと、斯く仰せられた。

斯くして正に釋尊は、出世一大事の法門を宣說せんと遊ばされた、折しもあれ、會中に在つた五千人の比丘・比丘尼・優婆塞—信男・優婆夷—信女の增上慢の四衆は、佛智を疑ひ、自己の悟りに滿足して、最早この法座に在るの必要もないと、起つて佛を禮拜し、座を去つた。

然るに世尊は、五千の增上慢の退席をみそなはしても、別にこれを抑制せんとも遊ばされず、

我が今此衆は復枝葉無し、純ら眞實のみあらん、舍利弗、是の如き增上慢の人は、退くも亦佳し、汝今善く聽け、當に汝か爲に說く可し、

と、愈々、出世の本懷たる法華一乘の妙法は、顯說せらるゝことになつた、而してその顯說遊ばされた所は斯うである。

我れ釋迦牟尼が、菩提樹下に於て成道してより已來、四十餘年の永きに亙つて、菩薩の爲には菩薩の修行す可き處を、緣覺の爲には緣覺の修行す可き法を、聲聞の爲には聲聞の修行す可き道を夫れぞれに說いて、ありとしあらゆる法門を宣べ來つたもの

の、未だこれは我が眞實の目的ではなかつた、謂はゞ、如來の實智を應用して、一乘眞實の道法に誘導せんが爲の、方便權說であつた、一切諸佛が世に出でさせ給ふ所以は、唯、一大事因緣の故である、一大事の因緣とは、一切衆生に、本來本有の佛知見を開き、佛知見を示し、佛知見を悟らしめ、佛知見に入らしめんが爲であつて、我はこの目的の爲に、四十餘年の長きを費して、汝等の敎化に努力したのであつた、卽ち有ゆる衆生が、修行す可き究意の道としては、唯、一佛乘のあるのみであつて、二あるなく三あるなし、始めに權の敎を說いて後に實の敎を顯し、始めに三乘の敎を語つて後に一乘の法を示す事は、十方の諸佛、過去の諸佛、未來の諸佛、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の說法の儀式順序で、我れ釋迦牟尼も亦、この儀式に依つて汝等を今日迄化導し來つたのであつた。

舍利弗、汝等當に一心に信解して佛語を受持すべし、諸佛如來は言虛妄なし、餘乘あることなく唯一佛乘のみなり、

と、玆に始めて、開三顯一として三乘の敎を開いて、一乘の敎を說き示された、これが方便品一品の組織の梗概である、更に下に、重要敎義の頂目を逐ふて、一品の全體に要解を試むる事とゝする。

【註】十大弟子、智慧第一の舍利弗、神通第一の目健連、頭陀〔淸淨修行〕第一の大迦葉、天眼第一の阿那律、解空第一の須菩提、說法第一の富樓那、論議第一の迦旃延、持律第一の優婆離、密行第一の羅睺羅、多聞第一の阿難陀。

菩薩、利他を主として、六婆羅蜜を修行する人、
緣覺、自利を主として、諸法の緣に依り悟る人、
聲聞、自利を主として、佛の說法を聞き悟る人、
大乘敎〔人〕　小乘に對す、大人所乘の義、乘は運載の意、宇宙の實體なる眞如を說くもの、大乘に權實ありて實大乘は法華經、他は權大乘、
小乘敎〔人〕　大乘に對す、小人所乘の義、乘は運載の意、眞如を說かざるもの、
阿羅漢　小乘の敎によりて悟れる聖者の位、
三乘敎〔人〕　菩薩、緣覺・聲聞の敎、
一乘敎〔人〕　佛乘をいふ、法華經これなり、

(四) 無問の自說

爾の時に世尊、三昧より安詳として起つて、舍利弗に告げたまはく、

この一句が、正しく方便品の說き起しであつて、釋迦牟尼佛の「無問の自說」は、茲に始まるのである、申來、多くの經典の結構では、先づ對告衆たる誰かの問か請かゝあつて、說法の始まるのが一般であるのに、この方便品には、何人の問もなく、誰人の請もなく、釋尊は、小乘羅漢の中に於て智慧第一と稱へられた舍利弗の名を呼んで、汝舍利弗よ、と仰せられたのは、餘經に稀に見る法說の儀式である、これを無問自說といつて、恰も天鼓の擊たざるに自然に鳴るが如く、今や春雷四方に響くの有樣を以て、時至り機熟して、內に大慈悲の意輪動き、外に口輪の梵音の御聲となつて、未曾有の大法が顯はるゝのである。

靈山一會の大衆の中から、特に舍利弗を對告衆として呼び出されたのは、羅漢小乘の小機を、一乘法華の大機に進め給はんとする甚深の佛意の存する所で、又、舍利弗の智慧第一なる事は、將に說かんとする諸佛の智慧の廣大深遠なるを讃歎する上に、いともふさはしい事である、斯くして、佛の舍利弗に告げ給ふ所は何か。

(五) 權實の二智

釋迦牟尼佛は、先づ諸佛の權智實智を、

諸佛の智慧—實智—は甚深無量なり、其の智慧の門—權智—は難解難入なり、

と稱歎遊ばされ、重ねて釋尊自己の權實二智を歎美して、緣覺や聲聞なんどの、露ほども窺知し能はぬ幽妙なものである旨を、言辭を極めて仰せられた、而して釋尊は舍利弗に向ひ、汝に諸佛の二智を委細に告げ知らしめたいが、そは如何にせん、汝達の到底も了解し得ぬ所であれば、

止みなん舍利弗、復說くべからず、所以は何ん、佛の成就したまへる所は、第一希

有難解の法なり、唯、佛と佛とのみ、乃し能く諸法の實相を究盡したまへり、

と、舍利弗を抑制せられたのであつた、斯くも釋尊が稱歎遊ばさるゝ、諸佛の權實二智とは如何なるものであるか、卽ち「實智」とは、佛が諸法實相の妙理を證語せる智慧の本體であつて「權智」とは、その智慧の本體から起る大慈悲を以て、一切衆生を救濟せらる、妙化の智慧をいふのである、前者を眞實智、後者を方便智ともいふ、要するに、諸佛はこの權實二智を以て、衆生を化導さるゝので、衆生の性慾機根に應じて說かれたものが權敎で、如來の本懷をそのまゝに宣べて、一切衆生に一乘の道を敎へるのが實敎である、一は隨自意の說で、一は隨他意の說である。

玆に注意を要することは、凡そ佛敎を研究し信仰するものは、佛の隨宜の說である方便說と、本懷の說である眞實說との二つに就いて、明確な判斷を持つて居なければならぬ、假にも、權敎權說に執着して、實敎實說を蔑如するが如な事があつては、由由敷大事で、之れを下尅上といふのである、佛の權實二智の妙用は、我等の容易に分別し得ざる所であつて、法華一乘の顯說さるゝ時、四十餘年の經々は、悉く方便隨宜の說として、衆生の機根透導の手段であり、方法であつたに過ぎないのである。

〔六〕十如實相

釋迦牟尼佛は、止みなん舍利弗、復說く可からずと一度は制止せられたものゝ、このまゝに終つては、靈山一會の大衆は、出世本懷の大事を、おぼろげながらに聞くことさへ能きない、そこで世尊は、佛と佛とのみ究盡せる諸法實相の妙理とは、如何なるものであるかを玆に十如實相の文を以て、舍利弗に告げられたのである、經文に云く、

所謂、諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果如是報、如是本末究竟等、

と、この諸法實相は、迹門法華の哲理の根柢をなすものであつて、又、大乘佛敎の基

礎哲學である。天台大師はこれに依つて「一念三千論」を立て、日蓮上人已前に於ける法華經の哲學を大成せられた、斯る大切な教理であるから、詳細に叙述しないでは慨要をさへ把捉し難いが、今はそれが要解のみを述ぶる。

「諸法實相」とは、法華經の宇宙觀である、諸法とは現象で、實相とは實在、而してこの諸法の外に實在なく、實相の外に現象はない、この二者は不二であり、圓融したものである、即ち、今日の哲學に語る現象即實在の世界觀であつて、森羅三千の萬象は、眞如の一理即ち道の活き、道の現れである、天地の萬有は、一としてこの道を離れたものではない、この道理に體達したものが、覺者であり、迷惑せるものが、凡夫である、更にこの諸法實相の妙理を説明して、あの有名な十如是なるものは説かれた、即ち諸法の實相は、萬有一切に本來本有として具はつて居る十如是其者である。

然らば十如是とは、如何なるものであるか、十如是とは、

一、如是相　外面に現れた形相

二、如是性　内部に存する性質

三、如是體　事物の總體

四、如是力　事物の能力

五、如是作　事物の動作

六、如是因　事物の種因

七、如是緣　事物の助因

八、如是果　種因の結果

九、如是報　助因の結果

【註】因緣果報の四つの關係を一言するならば、例へば、我等は皆一樣に、人と生る可き「因」に依て、人間の果を得て來たものであるが、因を助くる種々な「緣」の相違があつて、等しく人間の「果」は得て居るも、賢愚・貧富・貴賤・美醜の「報」を異にするのである。

十、如是本末究竟等　最初の相を本と呼び、最後の報を末として、詮ずる所、この

九如是は因果の法則の外に在るものでないといふのである。

要するに十如是は、充足完備した因果の法則の說明であつて、この因果の法則は、宇宙を支配する唯一の法則である、この因果の法則が、取も直さず、諸法の實相であつて、森羅の萬象は、皆この大法則の運用の下に存在するのである。

【註】天台大師は、この十如の文に依つて、空假中の三諦圓融を語り、更に進んで、先にもいつた一念三千論を論じた、十如是の文は、義演三讀といつて、空假中の三つの讀方がある、卽ち如是相・如是性・如是・性・如是・相・如是・性・如是…と讀むのは假、是相如・是性如…と讀むのは空、相如是・性如是…と讀むのは中諦を現はすのである、古來この十如の文は、略法華、或は破地獄の文と迄いはれた程の大事な經文であるから、大に專門的にも研究されん事を、敢て薦める。

三諦、三とは空假中であつて、諦とは誠諦眞實の義である、龍樹菩薩の「中觀論」の、因緣所生法、我說卽是空、亦爲是假名、亦是中道義、の偈から名を得たのである、一事物に對する三方面觀であつて、假は事物が因緣和合して、顯現し自性自體あるが如きその假相を觀て名付け、空は事物は因緣和合の結果で、自性自體あるに非ずと觀るので、中はその空假の二觀は、共に事物の實相を確かめたものでないと、空假に片寄らぬのないふのである、因よりこの三諦は、相卽圓融、卽ち不離一如のものである、この三諦圓融の妙理から成つた觀念が、一念三千論である。

一念三千、一念とは我等の刹那の一念をいふので、三千とは十界—佛界・菩薩・緣覺・聲聞・天人・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄—に各々十界を具すれば百界となり、百界各々に十如を具すれば千如となり、この千如に、衆生世間—正報として十界の衆生、國土世間—依報として十界の衆生の國土、五蘊世間—色・受・想・行・識として衆生國土兩世間の素質、の三世間を乘じたものであつて、この三千の數を以て、森羅の萬法を包攝せしむるのである、この三千が、我等の一念に存在して居る事を、一念三千といふのである、この一念三千は、何事を語るものであるかといふに、法華經の宇宙觀である、法華經已前に於ける世界觀では、有とか無とか、眞如とか、實相とかと抽象的世界觀であつたが、一念三千論が現はれて具象的世界觀、現象卽實在の哲學が、始めて大成されたのである、宇宙觀の上に、この哲學的基礎のある事が、我等に、一切衆生悉有佛性を、確認せしめ得るので、法界の、『萬法互具互有の妙理を敎へたものである。

〔七〕一會の疑惑

釋尊が、未曾有の讃辭を以て、諸佛の權實二智を稱歎遊ばされたものであるから、一會の中の阿若憍陳如等の千二百の阿羅漢、及び其の他の大衆は、一佛二言の如き疑

の念を以て、

今や世尊、何が故ぞ、慇懃に方便を稱歎して是の言を作したまふ、佛の得たまへる所の法は、甚深にして解し難し、言說したまふ所あるは意趣知り難し、一切の聲聞辟支佛――緣覺の及ぶこと能はざる所なり、

と心の疑を申し述べた、時に舍利弗は、人々の心の疑怪を知つて、我れにも亦同じ疑問があるから、いと叮寧に佛に向つて、何故に世尊は、斯くも慇懃に、諸佛の智慧を稱歎し給ふのであるか、その所以を一會に說き示し給へ、と一會に代つて請ふたのであつた。

〔八〕三止三請

この釋尊と舍利弗の應答に就いて、「三止三請」といふ大切な法義がある、曩に無問自說の項に於て如來は、「止みなん舍利弗、復說く可からず」と第一止があつた、すると前頂の下に在つて、舍利弗は衆に代り、

合掌して敬心を以て、具足の道を聞きたてまつらんと欲す、

と第一請をなした、然るに如來は、舍利弗に告げて、

止みなん止みなん、復說く可からず、若し是の事を說かば、一切世間の諸天及び人皆當に疑或すべし、

と、斯る大事な事柄は、容易に說く可きものでない、爾前四十餘年には、未曾有の出來事であれば、却つて衆の疑惑を惹起すであらうと、切なる舍利弗の乞を斥けさせられた、これが第二止である、然し、舍利弗の聞法求道の心は、更に勵まされて、「世尊唯、願くば之を說きたまへ」と、第二請に及んだが、尙も如來は、止みなん舍利弗、若しこの大法を說くならば、增上慢の人達は、不信の念に依つて、地獄に墜つるであらう、と第三止を遊ばされた、然るに舍利弗は、如何にしてもこの儘默するに忍びないで、一會に代つて、如來の說法に敬信の旨を誓つて、第三請したので、玆に於て、如

來は、

汝已に慇懃に三たび請じつ、豈說かざるを得んや、汝今諦かに聽き、善く之を思念せよ、吾當に汝が爲に分別して解說すべし、

と、始めて一會の大衆は、如來の許諾を得た。

この三止三請は、後の本門壽量品の「三誡三請重請重誡」と、本迹二門に相呼應して、佛の深い御意が窺はれるのであつて、古來、この「止」の一字に就て、二義が釋されて居る。

一に叮重の義　本懷の大法なれば輕々しくせぬ爲、

二に誘發の義　一會の大衆を奬勵し警策せんが爲、

如來三止のあるのも道理であつた、果せる哉、今や將に、如來は開三顯一の大事を說き給はんとする間際に當つて、五千人の增上慢の輩は、俄かに席を起ち、佛に禮して法座を去つた、これを「五千起去」といつて、法華經の中に於ける、大切な出來事の一つである。增上慢とは、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證すと謂ふといつて、自己の小智小果に誇つて、佛智佛果を憧憬する事のない、求道の念の枯渴した輩をいふのである。

〔九〕出世の本懷

五千起去のことあつて、今や靈山一會の大衆は、一切の枝葉糟糠を去り、一座皆純ら眞實のものゝみとなつて、斯くて釋尊は、出世一大事の因緣を語り出し給ふた、優曇華の時に一度華咲くが如く、如來の口輪は靜かに動いて、大梵音聲は、靈鷲の山の高きより、

諸佛世尊は、唯一大事の因緣を以つての故に世に出現したまふ、舍利弗、云何なるをか諸佛世尊は唯一大事の因緣を以ての故に世に出現したまふと名くる、諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ、淸淨なる事を得しめんと欲すが故に世に出現し

たまふ、衆生に佛知見を示さんと欲すが故に世に出現したまふ、衆生をして佛知見を悟らしめんと欲すが故に世に出現したまふ、衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲すが故に世に出現したまふ、

と、全世界に亙つてその響を傳へた、諸佛世尊の一大事の因緣とは　外でない、法界の一切衆生に「開示悟入の四佛知見」を得せしめて、如我等無異の佛の境界に到らしめんとする大慈悲卽ちそれである。日蓮上人曰く、

經文分明に十界互具これを說く、所謂、衆生をして、佛知見を開かしめんと欲す等と云々、天台この經文を承けて云く、若し衆生に佛の知見なくんば、何ぞ開を論ずる所あらんや、當に知るべし、佛の知見の衆生に蘊在することを云々、章安大師のいはく、衆生に若し佛の知見なくんば、何ぞ開悟する所あらんや、若し貧女に寶藏なくんば、何ぞ示す所あらんや。

と、我等の身體には、尊い佛性が本來具して居るものであつて、衆生は、無明の酒に醉ひ、煩惱に閉ざされて、この道理を覺ることが能きないのである。佛と我れとは、體同用異といつて、體は同じく用きの異るのみである、今、衆生の當體に、この尊い佛性の存在することを敎へて、これを開き、これを示し、これを悟らしめ、これに入らしむるのが、諸佛出世の本懷であつて、例へば、寶藏を打ち開いて無價の寶珠を示し、さてはこの身は斯る寶珠の主であるかと悟らしめ、而して入用に應じて、その寶珠を己が心の儘に使用せしむるが如なものであつて、我等の佛性を開顯して、如來と等しき力用を起さしめんとするのが、如來の本誓願であつた、衆生の當體に、佛性の存在せることを、一點の疑もなく、明確に意識せしむる事は、實にも尊い事で、これが宗敎の主體論たる人身觀の究竟目的である、謂はゞ、この問題が方便品の使命であつて、「二乘作佛」もこれに成り、開三顯一も玆に確立するので、

舍利弗、如來は但一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を說きたまふ、餘乘の若は二若は三あることなし、

と仰せられた、この經文で分明であるが、爾前四十餘年の間に說かれた三乘の敎は、實は如來の方便であつて、眞實法華の一乘を稱して二と說き、又、三と語つたのである、玆に於て、釋尊は正に三乘方便、一乘眞實の理を宣べて、明かに開三顯一を宣示せられた、開三顯一とは如何なる義か、開三とは、法華已前に於いて、三乘の方便なる由を祕して、眞實の如く裝ふて居たのを打ち破ることで、顯一とは、三乘の方便なる所以を明して、法華一乘の道を示す事である、斯の如き前權後實は、如來說法の儀式である、經に云く、

世尊の法は久しくして後に、要ず當に眞實を說きたまふべし、

と、日蓮上人曰く、

佛御年七十二の年、摩竭提國靈鷲山と申す山にして、無量義經を說かせ給ひしに、四十餘年の經々をあげて枝葉をば其の中におさめて、四十餘年未顯眞實と打消し給ふは此れなり、此時こそ、諸大菩薩諸天人等は、あはてゝ實義を請せんとは申せしが、無量義經にて實義とをぼしき事、一言ありしかども、いまだまことなし、譬へば月の出んとして、其體東山にかくれて、光西山に及べとも諸人月體を見ざるが如し、法華經方便品の略開三顯一の時、佛略して一念三千心中の本懷を宣べ給ふ、始の事なれば時鳥の音をねをびれたるものゝ一音きゝたるがやうに、月の山の半を出でたれども、薄雲のをほへるが如く、かそかなりしを、舍利弗等驚きて、諸天龍神大菩薩等をもよをして、諸天龍神等其數如二恒沙一求レ佛諸菩薩大數有二八萬一又諸萬億國轉輪聖王至合掌以二敬心一欲レ聞二具足道一等とは請ぜしなり、文の心は四味三敎四十餘年の間いまだきかざる法門、うけ給はらんと請ぜしなり、

この開三顯一を、今一層具體的に語つて、所謂「四一開會」の法門がある、四一開會といふ事は、敎、行、人、理の四つのものを、一佛乘に開顯し融合せしむる義である、それは、敎といひ行といひ人といひ理といひ、各々種々に分れて居て、敎は八萬四千もある、行は千差萬別の修行がある、人も三乘五乘—三乘に天と人を加ふ——と類別

されてあるし、唯一、無二の眞理といつても、無量に說き分くる事が能きる、それが爾前四十餘年の說法に於ては、何れも別々に散說、重說されて居るが、それが今法華經に來つて、歸趣を得、開顯されて一佛乘になるといふ意味が、この四一開會である

この點に於ても、法華經が無量の敎法を統一す可き權能のある事が、窺ひ知らるゝであらう、この意義を更に敷衍するならば、敎法觀、行法觀、人身觀、法界觀の敎義を生ずるに至るのである。

〔十〕說法の儀式

斯くの如く前權後實とて、始めに三乘方便の敎を說き、後に一乘眞實の敎を語つて開三顯一する事は、これ如來說法の儀式であつて、獨り我れ釋迦牟尼が今日の說法の儀式のみではない、一切十方の諸佛も、過去の諸佛も、未來の諸佛も、現在の諸佛も世に出でさせ給ふては、無量の方便、種々の因緣、譬諭の言辭を以て、諸法を演說して衆生を引導し、最後に一佛乘を明して、等しく成佛の大事を成ぜしむるものである、我が釋迦牟尼も、この諸佛の說法の儀式に則つて、爾前四十餘年の間、權敎方便を以て汝等を誘導し、今日法華經の會座に到り、始めて實敎眞實を以て、究竟の大涅槃樂を得せしむるのである、と如來はいと懇ろに說き誡された、これが五佛——十方佛・過去佛・未來佛・現在佛・釋迦佛——同道開三顯一、或は、三世十方の諸佛說法の儀式ともいはるゝものである、經に云く、

三世の諸佛の說法の儀式の如く、我も今亦是のごとし、

と、斯くして本品は、漸くその終を結び、經文は偈文に移つて、又種々なる大切な法門が談ぜらるゝのである、其等の要解をば、次に頂を新たにして說く。

〔十一〕要文の解釋

方便品の中に說かれた敎義には、頗る重大なものが澤山にあつて、一々これを要解する事は容易の業でない

上來數項に亙つてその大體を論じたものゝ、固よりこれで盡きた譯のものではない、だからとて煩雜を顧みないで一々の問題に觸るゝ事は、要解の目的でもないから、二三の要文を摘出して、幾分にてもその不足を補ふ事としやう。

▽汝我等無異の文

舍利弗當に知るべし、我本誓願を立てゝ、一切の衆をして、我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如き、今者已に滿足しぬ、一切衆生を化して、皆佛道に入らしむ、

藥師の二六の願も、彌陀の六八の願も、皆、權の願である方便である、釋尊の本願は、一切の人々をして、佛の如くに等しくして異ること無からしめんとするのであつて、これが又三世十方の諸佛の本誓願であり、これを總願といふのである、彌陀は安養極樂の一局を願つて未來に傾き、藥師は現世の一方に偏するなど、彼等の願は、個個別々の一小願に過ぎないのである、我等はこの別願をすてゝ、釋尊の說き示し給ふ本誓願、卽ち總願に必然同歸す可きである、この理義を信解したならば、何で權佛の願に迷ふものがあらうか、日蓮上人曰く、

釋迦諸佛の衆生無邊の總願は、皆この經に於て滿足す、今者已滿足の文これなり。

▽唯有一乘の文

十方佛土の中には、唯一乘の法のみあつて、二もなく又三もなし、佛の方便の說を除く、

爾前四十餘年の說法は、唯法華一乘の爲であつた、例へは一軒の家屋を建築するには、先づ足代を組み立てるが、落成の後には、足代は取拂はれてしまうやうに、如來一代の經々、五十年の說法も、この法華一佛乘たる妙法蓮華經の爲であつた、種々の方便、因緣、譬諭の多きは、丁度足代の如きものである、天を仰げは二日なく、國に二王なく、大海の汐の一味なるが如く、如來の說法は一乘である、然るに彌陀の三部經に偏し、或は藥師大日の經々に沒頭して、一乘眞實の大法を忘却するが如きは、

憐む可き輩である、日蓮上人曰く、

しかのみならず、正直捨方便、不受餘經一偈の經文を、女のかゞみをすてざるがごとくに、男の刀をさすが如く、すこしも捨つる心なく、案じ給ふべく候。

▽無一不成佛の文

若し法を聞くことあらん者は、一りとして成佛せずといふことなけん、

この經文は、皆成佛道の文と併せて、古より十界皆成の文と呼ばれて、悉く一切衆生の佛性を開顯し、等しく菩提の彼岸に導く、法華經の大利益を說かれたものである、菩薩もこれにより、二乘もこれにより、人天もこれによつて成佛するのみならず、地獄餓鬼畜生修羅の四惡趣の衆生の成佛も、この法華經によるの外はない、日蓮上人曰く、

何なる時節ありてか、毎自作是念の悲願を忘れ何なる月日ありてか、無一不成佛の御經を持たざらん。

▽小善成佛の文

若は曠野の中に於て、土を積みて佛廟を成し、乃至童子の戲に沙を聚めて佛塔を爲す、是の如き諸人等、皆已に佛道を成じき、

この一文を、小善成佛或は人天開會の文といふて、一經の大事である、所謂、小善成佛とは、小さな善根、微弱なる功德の眞似が、やがて大なる佛事となるといふ、極めて大切な事である。經にある如く、小供が戲れに沙を集めて、塔に眞似たものを造り、佛に捧ぐる稚な心も、やがては佛道に入り、佛道を成ずるといふ意味であつて近來、識者か宗敎の萠芽を尊重して居るのは、この經旨に適ふて居る、この小善を啓發し、法華の大信念に融會するのが、如來の御意である、但し玆に注意す可きは、小善を以て大善を打つが如きことは、特に誡めねばならぬ、日蓮上人曰く、

法華經誹謗の相貌は、四十餘年の諸經の如く、小善成佛を以て別時意趣——一機一緣——と定むる等なり、故に天台の釋に云く、若し小善成佛を信ぜずんば、則ち世

間の佛種を斷ずるなり。

譬諭品第三

〔一〕本品の生起

上來、方便品に於て釋迦牟尼佛は、諸法實相、四佛智見、開三顯一なんど大切な法門を、縱横に宣說遊ばされたので、上根上智の舍利弗は、先づ無明の雲齊れて、領解證悟したもの丶、中根中智の四大聲聞等の、尙ほ迷夢覺めやらず、未だ疑團解くるに由なき樣を見て先覺の舍利弗が、佛の慈悲にすがつて、彼等中根中智の衆の爲めに前權後實の理を說き給へと如來に希ふた、於此、佛は巧妙なる「三界火宅の譬諭」を以て、開三顯一の理を說法し給ひ、佛陀の大慈悲は、更に一段の深さを加へ來つた之れが此品の生起である。

〔二〕題名の解釋

本品を「譬諭品」と名付くる所以は、經文に、

舍利弗、今當に復譬諭を以つて、更に此の義を明すべし、諸〳〵の智者らん者、譬諭を以て、解ることを得ん、

とある、譬諭の文字に就いて、「譬とは比況、諭とは曉訓なり」と稱せられてあつて、彼と此とを比べ合せて、淺きを以て深きを訓へんが爲めに、三界火宅の譬に寄せて、中根中智の四大聲聞に、三乘方便、一乘眞實、開三顯一の法門を語らるゝのである、釋尊がこの巧なる譬諭を說いて、中根中智の衆に利益を得せしめらるゝので、譬諭品といはるゝのである。

〔三〕舍利弗の證語

此法華經は、始より終まで、能化の佛も所化の大衆も、共に觀喜に充ち法說に住して居るが、これは大に注意すべきで、こゝにも上根の舍利弗は、開三顯一の極理を領解し心に踊躍を懷いて、今日迄卑んで居た自己の當體が、貴い「眞に佛子なり、佛口より生じ、法化より生じて、佛法の分を得」て、身心共に泰然として、安穩の思を得たのである。

〔四〕如來の述成

時に釋尊は、舍利弗のこの歡喜をみそなはし宣べ給ふには、舍利弗よ、汝は古い往昔から不斷に我說法敎化に浴して居るので、曾に今日の化緣のみの淺い因緣では無い然るにこの厚く深い關係を忘れて、汝が小乘小果に甘んじて居るのを憐んで、斯くは今番出世の砌、過去世の因緣を憶ひ起さしめて、大乘得果の爲めに、開三顯一の妙義を說法した次第であると、佛は述成たまふた。

〔五〕舍利弗の記別

斯く釋尊は、分明に舍利弗の過去世を述べられて、彼が今日開三顯一の證悟の德に依つて、當に「作佛することを得」べしと、成佛の記別を與へ給ひ、名は「華光如來」國は「離垢」時は「大寶莊嚴」と記された、此の一段は、法華經中に於て、重要なる二乘作佛の敎義であつて、法華經研究者の留意す可き大事な箇所である、佛敎の人身觀の解決は、此の二乘作佛を離れては、全く不可能であつて、而も壽量品と相待つて法華經中二大敎義の一つである事を、記憶して戴きたい。

〔六〕衆部の歡喜

今や釋尊が、舍利弗に華光如來の記別を與へ給ふを見て、四衆八部は、心の中に大に歡喜して、踊躍びの餘り、佛に上衣、妙衣、天華、伎樂の大供養をなした、此光景が

如何にも莊重で、而も諸天供養の如きは、何所迄も、法華經の構想の遠大なる事が、偲ばれるではないか。

〔七〕如來の解說

世に稱して二乘根性と云ふ事があるが、これは純利己主義を指したもので、今迄自利心のみで、利他の思想を殺して居た舍利弗も、一度び如來の方便巧智に照されて、成佛の記別に浴し、自利一片の非を悟るや、茲に、未だ開三顯一の法門を證得せざる中根中智の聲聞をも、我れと等しく佛の大慈大悲に與からしめやうものと、彼等を思ふ至情禁じ難く「願くば四衆の爲に、其因緣を說き、疑悔を離れしめ給へ」と、懇ごろに佛に請ひ奉つた、茲に於て、釋尊は、更に衆をして解り易からしめんがために、譬諭を以て、開三顯一の眞意を說き給ふのである。

惟ふに法華三周の說法と云ふて、「法說」「譬說」「因因緣」の三つが完備して居る事は法華經の誇で、而も佛陀の大慈が窺はれるのである、抑も、法說は、上根上智の者を對告衆として、深遠なる敎法を短刀直入、如何にも卒直に說かれたものであるが、それで合點領解の能きない中根中智の者の爲めに、更に慈悲が發動して起る說法を、譬說とて、巧妙なる譬諭を藉つて說明さるゝのである、前に擧げた如に、譬は比況といひ、諭は曉訓と云つて、共に物になぞらへて曉する事である、されど譬諭にても尙ほ解り得ざる所謂下根下智の者の爲めに、先づ、ありし昔の種々なる因緣を物語つて、人の情に訴へ、無上道に引き入れ給ふ佛の懇切なる說法の有樣を、因緣說といふのである、此の因緣說こそ、洵に衆生化導の上に於て、刹那も忘る可からざる大切な方法であつて、啻に佛敎の上のみならず、假りに世間萬般の事に就いても、吾人の親しく實感する所である、此の實感より飜つて、三周の說法を味ふならば、如何にもと、如來が衆生敎化の周備の程に驚歎されるであろう。

〔八〕火宅の譬諭

三界―欲界、色界、無色界―火宅の譬諭は、正しく當品の正説で、中根中智の爲めに設けられた開三顯一の譬説である、先づ下に其大樣を述べやう。

或る一村落に、年老つた大長者があつた、固より彼の長者は、肩を並ぶ者もない富豪であつて、僮僕の數も中に澤山であつた、廣大なる其家は、庭園に唯一つの門があるのみで、大分建築も古びて、最早改築を必要とする迄になつて居つた、

一日突然火を失して、將に大事に至らんとした、長者の小供等は三十人もあつたが彼等は此の大火をば「不レ覺不レ知不レ驚不レ怖」して、屋内に戯れ遊んで居る、父の長者は此樣を見て、一方ならず驚いて、ソラ大事だ〳〵と、注意したものゝ、我を忘れて嬉戯して居る小供等は、敢て逃げ樣ともしないので、身手に力ある長者は、衣械、机案を以て、一時に運び出さんとは思つたが、何分門は一つで狹小だから、思ひに任さない、長者は心も心ならず、再三火事よ〳〵、と叫んで、彼等を屋外に遁れしめんとしたが、彼等は尙逃げ樣とはしない。

其所で長者は、方便を設けて、小供等が平素から好んで居る「羊車」「鹿車」「牛車」好きに任せて、それ〴〵門外で遊ばうではないかと、彼等を喜ばせると、小供等は、此の言葉に心奪はれて、今迄の遊を棄てゝ、我れと先を爭ふて、安穩に火宅を走り出で、羊車は何處に？鹿車は何處に？牛車は何處に？　と父にそれ〴〵の車を求めた、時に父の長者は、固よりツマラナイ三車を與へようとでは無く、彼等が火宅をのがれ出て呉れるならば、三車に勝ること幾千倍とも知れぬ「大白牛車」を、一人々々に與へようとの心であつたから「今此幼童は皆是れ吾が子なり、愛するに偏黨無し」と、七寶を以て飾つた如何にも見事な大白牛車を、彼等に呉れたといふのである。

此の譬諭が有名な法華經七諭中第一の三界火宅の譬諭といふので、又三車大事の譬とも稱するのである。

斯く說き給ふて後、釋導は、舍利弗に告げて、舍利弗よ、此の父なる長者の所行は虛妄であつて罪があるであらうかどうか、舍利弗は答へて曰く、否、決して虛妄でもなく、又罪でもない、此の方便こそ三十の幼童を救ひ出したのであります、と。

〔九〕法諭の合譬

此の譬諭の中、主なるものを法門に合すならばいふ迄もなく、

長者＝如來、舍宅＝三界、一門＝一乘通路、三十子＝三乘衆、火災＝煩惱、三車＝三乘敎、大白牛車＝一佛乘卽ち法華經である。

要するに、前に幾度も繰り返した如く、釋迦牟尼佛は、此譬諭に因て、四十余年の長き間、三乘の敎を說き來つたものゝ、衆生皆成佛道の敎は、唯法華一乘なる事を敎へ示て、中根の衆に、開三顯一の理をさとらしめ給ふたのである。

〔十〕要文の解釋

此品の大意は、既に上來述べ了つたのであるが、更に研究者に指針を與へ、信仰家を策勵せんが爲めに、偈頌の要文が中の要文を摘出して、講說するのである、法華經は、各品々の偈文に、皆それ〴〵に要文があるが、別けても譬諭品の偈には、勸信の要文が澤山ある、これより下に、項を逐ふて其の要文を述ぶる事としよう。

▽三德有緣の文

今此の三界は、皆是我が有なり、其の中の衆生は、悉く是吾が子なり、而も今此の處は、諸〳〵の患難多し、唯我一人のみ、能く救護を爲す、

此の文は、吾々法華經を信ずる者の常恆不斷に心す可き、大切な經文であると同時に釋迦敎徒として、造次顚沛も忘れてならぬ經文である、古來、此の要文を稱して三德有緣の文といふて居る。

其三德とは、一に曰く、「主君の德」二に曰く「師近の德」三に曰く「父母の德」、此の三つの御德を略稱して、主師親の德と云ふのである。

日蓮上人が常に示されて居るには、藥師、大日、彌陀等を信仰して見ても、直接此の娑婆世界の我等には、主君でも、師匠でも、亦父母でも無い、唯獨り釋迦牟尼如來のみ、三德有緣の御佛である、と、其理由は、藥師といふも、大日といふも、彌陀といふも、假に衆生濟度の爲めに假說られた實體なき名のみの佛達である、然るに釋迦敎徒でありながら、三德有緣の釋迦佛を捨て、緣もなく、由緒もなく、又體も無い、權佛に歸命し、渴仰するとは、何たる不忠不敬不孝の事であらうか、而も此經文は、釋迦牟尼佛御自身の金口では無いか、何人と雖も、此に及向ふ事は斷じて容されないのである。

日蓮上人は、此經文を次の如く仰せられたが、寔に感恩の念、報謝の思、禁じられざるものがある。

佛は人天の主、一切衆生の父母也、而も開道の師也、父母なれども賤しき父母は、主君の義を兼ねず、主君なれども父母ならねば、おそろしき邊もあり、父母主君なれども、師匠なることは無し、諸佛は又世尊にて御座せば、主君にて御座せど、婆婆世界に出させ給はざれば、師匠にもあらず又其中衆生悉是吾子とも名乘らせ給はず、釋迦佛獨り主師親の三義を兼給へり。

▽以信得入の文

信を以て入ることを得たり、――佛語を信ずるが故に、此の經に隨順す、己が智分に非ず。

法華經の信仰は、信智一體の妙行であつて、自分の智力のみで、佛智佛見を獲ようとしても、それは到底不可能である、信仰といふ眞心から出る不思議な力が加はらなくては、眞の佛道に這入る事は至難である、此の以信得入非已智分の文は、小智に誇り、小見に慢つて居る人々の、迷を打開く鐵槌である。佛弟子中智慧第一と呼ばれた

舍利弗を對告衆として、此の偈を以て彼を訓誡された事は、釋尊の深意の程が偲ばれるではないか。

尤も以信得入とは言へ、或る宗教の如く、徹頭徹尾智慧を否定するのではない、涅槃經にも「信解圓通して行の本となる」とある、法華信仰の當相は、宜しく斯の如き妙味に達せなければならないと思ふ、日蓮上人曰く、

此の御本尊も只信心の二字にをさまれり、以信得入とは是也。

▽十四誹法の文

若人信ぜずして、此の經を毀謗せば、卽ち一切世間の佛種を斷ぜん、――其人命終して阿鼻獄に入らん、

玆に述ぶる十四誹法に就ては、親しく本經を拜見せらるゝならば、上擧の文の前後に當つて十四の數を擧げてある。

一、憍慢とは、オゴリタカブルことであつて、正法正義の一端だに心得ぬ癖に、知りたりげに振舞ふこと、

二、懈怠とは、ナマケルことであつて、正法を見聞しながら信行を怠ること、

三、計我とは、ヒトリギメのことであつて、正法に隨順せず、正師を手本とせず、獨斷に走ること、

四、淺識とは、アサハカナカンガヘであつて、深遠幽妙な正法に、思違をすること

五、著慾とは、ヨクニメノナイことであつて、慾に因はれて、正しい信仰の能きぬこと、

六、不解とは、ワカラズヤのことであつて、正法正義を解することの能きぬこと、

七、不信とは、シンゼヌことであつて、正法を聽聞しても信心氣の起らぬこと、

八、顰蹙とは、シカミヅラをすることであつて、正法の信仰を見聞して喜ばぬこと

九、疑惑とは、ウタガイマドウことであつて、正法を聞いても、決定信の得られぬ相のこと、

十、誹謗とは、ソシルことであつて、正法を誹り、正師を謗ること、
十一、輕善とは、カロンズルことであつて、正法正義を輕蔑すること、
十二、憎善とは、ニクムことであつて、正法と、行人とを俱ににくむこと、
十三、嫉善とは、ネタムことであつて、憎善が一層高まること、
十四、恨善とは、ウラムことであつて、正法正義に對する反對が、表に現はれる迄に、惡が極度に達すること、

以上十四の內、上の十は直接此の法華經に就て起るもので、下の四ッは、修行上から起ることを知つて置かねばならぬ、日蓮上人も、法華經修行の要意を、斯樣に示しになつて居る。

此の十四誹謗は、在家出家に亘るべし、恐るべし恐るべし。

▽捨惡知識の文

惡知識を捨てて、善友に親近す、

末代今の代に、正法を信じ行せんと思ふ者は、先づ第一に、惡知識を恐れなければならぬ、而して善友に親近する事が最肝要である、佛になる道も、菩提を成就するにも、善知識、善友が與かつて大に力あるものである、世間にも、水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友に因る、又古語には、惡人の友を捨て善人の敵を招け、と迄も云つてあるではないか、まして成佛の大事を成ぜんとする者には、此經文は肝銘すべき大切な御經である。日蓮上人曰く、

此經文の心は、後世を願ん人は、一切の惡緣を恐るべし。

▽不受餘經の文

但樂ひて、大乘經典を受持して、乃至餘經の一偈をも受けず、

法華經の中に於て、信仰の情操を的確に指示せられたのは、此の經文である、凡そ何事に限らず、節操てふ事は最も大事であるが、中にも殊に法華信仰の上に在つて、片時も忘る可からざるものは信仰の操である、「しかのみならず、正直捨方便不受餘經

一偈の經文を、女のかゞみを捨てざるが如く、男の刀をさすが如くすこしも捨る心なく案じ給ふべく候」と日蓮上人が仰せられた通り、善につけても、惡につけても、法華經の外には、餘經の一偈さへも信ずる事を許さないのが、法華經の信仰である、而るに如何に間違へばとて、現在の聖祖門下一般の信仰が、雜亂雜多の迷信愚信に陷つて居るとは、何たる痴態であらうか、彼等は自からを、此經文に合せ見て、少しは顧る所があつてよろしかろう、さなくして經王たる法華經の權威を高調することは、望む可からざる事である、日蓮上人曰く、

日蓮が弟子旦那等、正直捨方便不受餘經一偈と信ずる故により、此の御本尊の寶塔の中へ入るべきなり、たのもしたのもし。

信解品第四

〔一〕本品の生起

限りなき釋尊の大慈悲は、前品に三界火宅の譬諭を說いて、中根の四大聲聞に、開三顯一の妙旨を示し給ふた、中根の四大聲聞は、漸くに迷夢から醒め、佛意を信解し、轉迷の情、悔悟の心、內に抑止するを得ず、前品に於て、開三顯一の佛意を合點したので、彼等はこゝに「長者窮子の譬諭」を以て、佛意の信解を述ぶるので、本品は生起するに至つたのである。

〔二〕題名の解釋

中根中智の四大聲聞は、譬諭品に於て、開三顯一の敎義を、三界火宅の譬諭に依て合點して、歡喜の情、踊躍の念禁ずる能はずして、信を發し、解を生じ、疑を去る事を得た、玆に於て、彼等は釋尊に向ひ、長者窮子の譬諭を以て、開三顯一の敎に對

する己が信解の有様を申述べた、この故に本品を、「信解品」と名付くるのである。

〔三〕中根の信解

經文には、須菩提、迦旃迦、迦葉、目連の四大聲聞が、

希有の心を發し、歡喜踊躍す、

とあるから、この四大聲聞が、開三顯一の佛意を、信解せられたことが、その内心にどの位嬉しかつたかといふことは、寔に想像に餘りある次第である、更にその喜びの樣が、次下のやうに、如何にもよく經文に現はされてゐる、即ち、

深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと、無量の珍寶求めざるに自から得たり。

と、

この四大聲聞等は、これまでの、小さな證悟を悔い、法華大乘の證悟を得たことに依て、無量の珍寶求めざるに自から得るが如き喜びで、我れ自身に、尊い本有の佛性を持つて居たのかといふことを、明確に信解して、長者窮子の譬諭を以て、佛意の領解を申し述ぶるに至つた。

〔四〕長者窮子

いふ迄もなく、これも法華七大譬諭の中の、大切なるものゝ一である、今經文の意義を、通俗に話して見るならば恁うである。

昔或る村に、一軒の大福長者があつた、倉と云ふ倉には、どれ程寶物が澤山蓄へてあつたか知れない程の、大した金持であつた。

或る時その大福長者が、何かの用事があつたとみえて、可愛らしい一人息子と連れだつて、或る賑やかな町へ行つた、すると、今まで堅く長者の手を握りしめて居たその子は、どう思つたのか、長者の手を振り離して、何時の間にか何處へか、行つてしまつた　父の長者がそれと氣がついた頃は、もう後の祭りで、頓とその影も姿も見

えなんだ、さあ、長者の嘆きは、何んなであつたらう、尊い種々な寶物、澤山な田畑假令、それがなくなる樣なことがあつても、迷子になつて居る我子を搜し尋ねたいといふ念が、常に心から去らない、取分、大福長者も、一年ごとに寄る年波を、防ぐことは能きないので、後々のことを考へるにつけて、折角汗水を流して貯蓄上げたこの財産も、他人の手に渡るのかと思ふと、今更乍ら、口惜い氣にもなるし、さらばといつて、別れた子供には尋ね當らず、とつをいつ思案にくれてゐた。

年月は遠慮なく過ぎ行いて、愛としい子に別れてから、指折り數へれば、早や五十年の昔になつた、水草が風のまに〳〵岸邊を漂よい廻つてゐる樣に、何の目的もなく、諸國を漂浪してゐた窮子は、回り廻つて父なる長者の國へ辿り來た、そして或る立派な家へ這入つて食を乞い求めた、勿論そ處が父の家であらうとは、夢にも知る筈はなかつた、門を這入つて見ると、その美くしいことは、未だ生れてから一度も見たこともない程であつた、そこでその窮子も、餘りの立派さに大層恐れをいだいて、此の樣なうちへ、こんな見素ぼらしい者が間誤ついてゐると、何の樣なめに逢ふか知れないと、蓬々の體で又元と來た道へ立ち去つてしまつた。

最前から乞食の樣子の、一部始終を見ていた、長者は、別かれてからかれこれ、五十年の久しい歳月は過ぎたが、親子の情は爭はれぬもので、その見素ぼらしい乞食が、眞實の我が子であることを、チヤント、見定めた、その時の長者の喜こびは、どの樣であつたであらう、多年が間、雨につけ、風につけて、少しの間も忘れる暇がなかつた我が子、姿こそかはれ、年こそ老ゐたが、可愛さは同じことで、その實子が、今門前に來てゐるのであるから、直ぐにも飛び出して、親子の名乘を上げやうとは思つたが、平素から思慮深い、長者のことであるから、決してそんな淺薄なことはしないで、すぐ樣お側についていた召使の者共に向つて、あの乞食を引つ捕へて來る樣に、と仰せになつた。

召使は、ハイ、承知仕つりました、と飛び出して、後を追いつけたのは、日頃から勇

者をもつて仕じてゐる、召使の一人であつた、乞食の手を強くつかんで、こら乞食大福長者様のお召だぞ早くこい、と引き立てた、その様が大層な權幕であつたから、先程の窮子は、腰を拔かさんばかりに驚ろき、尙ほ大聲をいだしていつた、どうぞ大王様、私は決して罪を犯した覺へはありません、どうか御赦しを願ひます、と泣き叫ぶので、トント手のつけ様がない、召使の者もそれを見ると、なんだか可愛そうであるが、怎うすることも能きないので、泣き叫ぶのも構はず、無理無體に引き捕へて、長者の前へ連れて來た、すると長者は、色々となだめたり、すかしたりして見たが、只々助けを願ふばかりであるので、流石の長者も、終いには手の着けやうがなくなつた、これではいかないと、今度は方法を變へることゝして、引き捕へた窮子を逃がしてやつた。

そこで智慧のある長者は、誠に見素ぼろしいなりをした召使を二人、窮子の住まつてゐる處へ差し向けた、こん度は、身なりも、身分も同じやうな者がやつて來たから、別に恐れる樣子もなく、遠慮のう互いに打ち解けて、大層懇意になつた、その時を付け込んで、大福長者の穢ない所の、お掃除番に一人入用なのだが、貴様は雇はれる氣はないかと、すゝめた、するとその窮子は、心地よく請合つて、次ぎの日から、これが自分に最も適している職だとして、忠實しく働らいて居つた。

よく働らくものだから、主人にも大層氣に入り、又仲間の者の氣受もよくなつた、思慮深い長者は、自分にも穢ない姿をして、十日に一つぺんといふ風に、チョコ〳〵と顏を出して、窮子を慰めてやつてゐる內に、段々と懇意さを增して、別に大福長者に逢つても、恐ろしがらない樣になつたが、心のうちはやはり奉公人根性が未だに除かれなんだ。

人間の壽命には定業がある、如何な大福長者でも、そんなに長がく生きられる筈がない、大福長者はふとしたことが原因になつて病床についた、そこで彼は、もしも萬一のことがあつては、ならないといふので、窮子に己が財產を知らして置かねばなら

ないと、財寶のありかを色々と教へたが、窮子は一向に我がものとは思はないで嬉しい顔もしないといふ有樣であつた、長者の心はいらだつたが致し方がない、其う此うしてゐる内に、大福長者の病も次第と重つて、も早命旦夕に迫り、今はもう臨終といふ間際になつたので、親族一同を枕邊近く呼び集めていはれるには、各々方、今日迄色々とお世話になりましたが、私はこれで臨終をいたしますが、その前に各々方に、聞いて戴かねばならんことが一つある、それは今迄隱して居たが、この者――窮子は、五十年前に、ふとしたことから私の手を離れて、行衞不明になつて居つた、自分の子であるが、この度不思議な緣で、再度相遇ふことが能きたのであります、そこに居るのは、私の眞實の子であります、私はこれ程の喜びはありません、從つてこの家の全財産は、この子の相續すべきものであります、と告げたのであつた、この長者の言葉を聞いて、今迄自分は、一人の奉公人であるとのみと思つていたこの窮子の喜びはどのようであつたでありませうか、

世尊よ、我等は恰もこの窮子の如に、佛子である事を忘れて今日迄生死の海に流轉して居たので、今日始めて法華經に到つて開三顯一の法門を聽いて、迷の雲が齊れました、と、四大聲聞が領解を述べた、これが長者窮子の譬諭の大樣である。

〔五〕法諭の合譬

この譬は如何にも、巧妙を極めて居るが、釋尊五十年の說法も、この譬諭の中に、攝盡されて居る、今これを合譬して見るならば、斯うである。

長者＝釋迦牟尼佛　窮子＝四大聲聞　迷出＝退大取小
念子＝如來の慈悲　財寶＝一乘法華經　讓財＝授記作佛

この長者窮子の譬によせて、天台大師は、華嚴より法華涅槃に至る如來五十年の說法に、五時の敎判を立てさせられた、卽ち、

稱怨大喚【見父恐怖】……華嚴

密遣二人【見使親近】……阿含
心相體信【父子相知】……方等
汝悉知之【出入寶藏】……般若
皆是子有【父子名乘】……法華

以上は、僅かに一品の要點のみを述べたのである、仔細に經意を合點して法華の信仰を確立しやうと思はるゝ人は、大切な經典であるから、熟讀してその妙旨を味はれん事を希望する。

藥草諭品第五

〔一〕本品の生起

一大佛敎の中に於て、法華經ほど秩序整然たる經典はなからう、各品を通じて拜讀して見るならば、その生起の次第順序が、如何にも完全したものである、本品の生起を述ぶるならば、先に中根の四大聲聞は、如來所說の三車大車の譬諭を聞いて、開三顯一の妙旨を領解し、長者窮子の譬諭を以て、佛意の存する所に對して信解を述べたのである、この時に於て、釋尊は彼等四大聲聞の信解が、正しく佛意に該當し、毫も違ふことのないのを證明し給はんと、重ねて懇ろに「藥草の譬諭」を示して、開三顯一の妙旨を宣說せらるゝのが、本品の生起した所以である。

〔二〕題名の解釋

本品を「藥草諭品」と名付くるのは、經文に、是を藥草の、各の增長することを得ると名く、の文に依つたものである、この藥草の譬諭の中には、雲あり雨あり山あり川あり、其他に種々の譬が說かれてあるが、特に藥草の文字を題名に冠らした所以は、三草二木

を擧げる中に、別して中草に配當せられた聲聞緣覺の二乘の得道を、中心に說かせられて居るから、斯くは藥草諭品と稱するのである。

『正法華經』にも、本品を「藥草品」と名付けてある、藥草の譬諭は、又、「三草二木の譬諭」ともいはれて、如來の法雨に霑ふ衆生を別けて、小草・中草・大草・小樹・大樹の三草二木に譬へられてあるからである。

三草、小草――人間天上、中草――聲聞緣覺、大草――藏敎の菩薩。

二木、小樹――通敎の菩薩、大樹――別敎の菩薩、

〔三〕如來の述成

譬說周は、正說――如來の說法のこと、領解――說法を聽聞して自己の合點せる有樣を述ぶること、述成――領解に對し如來がその誤なきを證明し給ふこと、授記――法華經領解の德により未來の成佛を保證すること、の四段になつて居つて、譬諭品第三は正說、信解品第四は領解、本品はその述成である、授記の一段は、次の授記品である、而して先づ、

爾の時に世尊、摩訶迦葉、及び諸〳〵の大弟子に告げたまはく、善い哉、善い哉、迦葉、善く如來眞實の功德を說く、誠に所言の如し、

と釋尊は、領解を證明し給ふて、前の信解品に於ける四大聲聞の領解が、佛意に背かざる事を、稱歎遊ばされた、如來の限り無き大慈悲は、一段の懇切を極はめて、三乘方便、一乘眞實の理を顯はさんが爲に、重ねて藥草諭を以て、巧に說き給ふのである。

〔四〕藥草の譬諭

釋迦牟尼佛は、中根の首座たる迦葉尊者に對して、譬へば、三千大千世界の山川谿谷土地に生ずる所の千草萬木及び諸の藥草など、名も形も色も各々異つて居るが、俄

かに一天に密雲が起つて、地上一面に覆ひ、沛然として一時にこの千草萬木に等しく雨が澍がれ、その澤ひは普く及んで小草中草大草小樹大樹それぞれ、それ相當に澤ひを受け、各自の種性に從つて、生長し、花咲き、果成るとするならば、これ等千差萬別の草木が、發生して居る大地には差別はない、降り來る雨の澤ひにも差別はないが、受けるところの草木に、千萬無數の差別があるので、各自に差別して、松は緑に藤は紫に生長するであらう。

この道理と同じことで、如來の說法の雨は、一相一味であるが、所化の衆生の機根が、千態萬樣なるがために、如來の說法の一相一味なる事を、知らず、覺らず、各自の性欲不同に應じて差別に領解し、得益することは無理からぬ事である、所詮、如來の說法には、二乘、三乘の差別はないが、得益の相違は、衆生の機根の相違によるのであると仰せられた、「佛智一音演說法、衆生隨類各得解」とは、正しく本品の意味を語るものである、古人は歌に、

諸共に一味の雨はかゝれども、松はみどりに藤はむらさき、【源信僧都】

と詠んで居る、經文に、

世間に充足すること、雨の普く潤すが如し、貴賤上下、持戒毀戒、威儀具足せる、及び具足せざる、正見邪見、利根鈍根に、等しく法雨を雨して、而も懈倦無し、

とあつて、如來の說法は平等であるが、衆生の性欲に差別があるのである、尙ほこの意味を深刻に感ずるのは、次の經文である。

佛の平等の說は、一味の雨の如し、衆生の性に隨ひて、受くる所不同なり、彼の草木の、稟くる所各の異るが如し、

佛の所說の法は、譬へば大雲の、一味の雨を以つて、人華を潤して、各の實を成ずることを得しむるが如し、

釋尊は、この譬諭の意をよく領解するならば、汝等の所行が、是れ卽ち菩薩の道であつて、漸々に修學し、悉く當に成佛するであらう、と宣說遊ばされたのであつた、

經に、

諸〻の衆生、是の法を聞き已りて、現世安穩にして、後に善處に生じ、道を以て樂を受く、

とあるこの一文は、一品の要文であつて、我等衆生は如來の說法を聽聞して、現世と後世の利益を願ひ、常に正しき道を守つて、現世は法悅に安住し、未來は成佛を期して、向上菩提の志を勵げまねばならぬ、世間出世間の兩善は、法華信仰の大本であるから、本品に說かれた「世間之樂及涅槃樂」又この「現世安穩後生善處以道受樂」の佛意を味はつて、道と離れず、而して常に法悅歡喜の生活が送りたいものである。

授記品第六

〔一〕本品の生起

中根――佛敎には、人の智慧を三階級に分つて、上中下とし、其の上位にある人を上根、次を中根、其の次を下根と呼ぶので、此所にいふ中根とは、下に現はれる四大聲聞を指すのである――の四大聲聞が、譬諭信解の二品に於て、三乘方便、一乘眞實の佛意を了り、更に如來は、懇ろに藥草諭品の中に、三草二木の譬を以て、一相一味を明し、如來の說法には差別無く、何れにも平等の利益を垂れ給ふ所以を說き示され、茲に四大聲聞の佛意の解了は、愈々明らかになり、如來は佛眼を以て、四大聲聞の意中をみそなはしたので、今や正しく、この一品の生起すべき一段になり來たつたのである。

〔二〕題名の解釋

如來一代の敎說も、唯敎理のみを說き列らねたものであつて、事實の證明が無くては、經意に完全せざる所がある、徹底せざる所がある、然るにこの理と事の二つが具

備して居る點は獨り法華の誇りであつて、餘經には缺如して居る、淨名經、思益經、大品經などにも、記別のことは示されてはあるが、寧ろ實際の上には、之を退けた跡が窺はれる樣だ、故に法華經が、この記別を大事にして居ることは、大いに留意すべき點である。

先づ題名の「授レ記」の二文字は、能化――如來――に約して言ふので、所化――弟子――に約するならば之を受レ記と云ふ、處で、授記卽ち記別を授けるといふのは、如來が未來成佛の記錄を授づけ與へ給ふことであつて、簡單に解り易く言ふならば、如來より成佛のお墨付を賜はることである、今この品は、佛が、迦葉尊者、須菩提尊者、迦旋延尊者及び目連尊者の四大聲聞に、記別を授け給ふたので、授記品とは呼ぶのである。

凡そ法華經には、三種の記別と云ふことがある、これは少し面倒ではあるが、今名前だけでも一言して置くならば、卽ち正、了、緣の三因佛性に對して授記せらるゝのである。

一、正因の記、不輕品の二十四字の如く、
二、緣因の記、法師品の十種の供養の如く、
三、了因の記、三根の人に與ふる記の如し、

とあつて、本品は正しく、之の第三了因の記の中に屬するのである、法華の前半分たる迹門の根本義は、先きに方便品にもいつた如く、二乘作佛の問題である、この重要教義をば、法華經を研究する人、信仰する人が克く體得し解了し得るならば、眞の人生觀を正覺しつゝあるもので、無上の幸福である、この意味合に於いて、眞の法華經の信仰に這入つた人は、この品に對し、四大聲聞の授記は、取りも直さず、自己が記別に預かつたと同樣の喜びを以て、拜讀し奉つるべきである。

【註】三因佛性、正因佛性とは、我等に本來本有として存在せる佛性をいふので、緣因佛性とは、この正因佛性を開發する種々なる助緣をいふので、了因佛性とは、因、緣完備して佛性が活動するのをいふのである。

〔三〕迦葉の受記

今、四大聲聞授記の有樣を、詳細に講ぜんとするならば、

一、行因、來世の修行
二、得果、成佛得道
三、劫國、國土と時節
四、壽命、在世の佛壽
五、正像、滅後流經の期間
六、國淨、國土の嚴淨

以上六箇の名目の下に、解說すべきであるが、斯くては餘り複雜になるから、こゝには摘要して簡單に語ることゝする。

玆に先づ釋尊は、大衆に告げ給ふて、迦葉尊者に記別を授けられた、我弟子迦葉は、未來に於いて「光明如來」となり、國は「光德」刧を「大莊嚴」と稱し、國土の淸淨崇嚴に到つては、本經に得も言はれぬ莊嚴の美を說かれて居て、其國には「魔事あること無く、假令「魔及魔民ありと雖も皆佛法を護る」と示されて居る。

〔四〕三大聲聞の授記

爾時に目連等の三大聲聞は、迦葉が授記せられたのを見て、希有の思に感極まり、歡の餘りに心悚ひ慄き、一心に合掌し、世尊を瞻仰り、暫くも目を放たず、同音に大雄猛世尊、諸釋の法王、我等を哀愍したまふが故に、而も佛の音聲を賜へ、若我が深心を知しめして、授記することを爲らるれば、甘露を以つて灑ぐに、熱を除いて淸涼を得るが如くならん、飢ゑたる國より來りて、忽ち大王の饍に遇へらんが如し、

等と、自からも親しく、佛口より成佛の記別に預からんと心の程を、白し上げたので

ある。

日蓮上人は、法華經以前の經典は貧者の膳で、法華經こそ、眞に大王の膳なれとの意味を、聖判に次の如く仰せられた、

爾前の國は貧國なり、爾前の人は餓鬼なり、法華經は寶の山なり、人は富人なり

此等の經意と祖文の聖意を眞に味識し來るならば、一代教判の上に、淺深勝劣を明らかにし、得益の有無を悉知することが能きる。

時に元に戻つて、如來は、三大聲聞の心中を知ろしめして、先づ始めに、須菩提に「名相如來」の記別を授け、國は「寶生」と名づく、と次ぎに迦旋延に「閻浮那提金光如來」の名號と「淨國」の國號を與へ給ひ、終りに至つて、目連に「多摩羅跋栴檀香如來」といひ、國を「意樂」と號すと、三大聲聞それぞれに、記別を授與し給はつた、これが本品の大樣である。

五　譬說の終尾

以上譬諭、信解、藥草及び本品の四品を以つて、三周の說法の第二段たる譬說段は終つたのである、此所に至る迄に於て、上中下根の衆は、悉く授記せられたので、これよりは譬說に洩れたる下根の衆を、救濟し給はんが爲めに、如來は、更に一層懇切に因緣說を用ゐさせ給ふことゝなつて、次下に來る各品は說かるゝのである、衆生の機根愈下るに連れて、如來の慈悲は益々加はり、佛陀の限り無き惠みの雨は、將に下根の衆生の上に灑がれて、彼等は平等の法味に霑ほふのである。

化城諭品第七

〔一〕本品の生起

『正法華經』の譯者は、本品を「往古品」と稱した位で、釋迦牟尼佛は、上來、法說、譬說の兩益に漏れたる下根の衆の爲めに、今日我と汝達との師弟の因緣は、今番出世の砌に於て、初めて結ばれた如な、淺き緣ではない、實にも遠く遠き過去世から師となり、弟子となつて、今日に至つたものである、と大通智勝佛と、其子十六王子の間の宿世の因緣に事寄せて、彼等の三乘眞實と思ふて居つた迷情を破らんと、三千塵點劫の結緣を顯はし、次いで化城の譬を以て、三權一實の妙旨、開三顯一の佛意を、證悟しめ給はんが爲めに、正しく本品は生起たのである。

〔二〕題名の解釋

「化城諭」の題名は、いふまでも無く、本品の中に於て說かるゝ「一城を化作す」の譬諭より取られたものである、化城の二字に就て、先哲は「化とは、佛の神力の所作にして、神力を以ての故に、無にして而も欻に有り、之を名づけて化と爲し、又非を防ぎ、敵を防ぐを、稱して城と爲す、」といつて居る、此の意義から考へて見ても、化城は其の實體があるのではない、化作られたる空中の樓閣の如きもので、開三顯一の妙義は、此の化城の譬に依て、法說よりも譬說、譬說よりも因緣說に至り、更に幾段の巧妙を極めて、下根の衆に對する限りなき如來の大慈大悲は、將に其の最高度に到達せんとして居る事を注意せねばならぬ。

〔三〕過去の因緣

乃往、過去の世に、大通智勝如來と申す佛がましました、其の御佛の御世は筆にも口にも說き得ぬ程、遠く古き昔であつて、譬へば人あつて三千大千世界

【註】三千大千世界とは、佛敎にいふ須彌山を中心として、東西南北の四大洲を一世界と稱し、その一世界を千合せたものを小千世界といひ、小千世界を千合せて中千世界といひ、中千世界を千合せてこれを大千世界と名づく、卽ちこの大千世界は、大中小の三種の「千」を含んで居るので、三千大千世界といふのである。

の地軸をも餘さず、磨つて粉末とし、固めて一個の墨を作り、それを磨り流した墨汁を、東の方千の國土を過ぎ往いて、僅かに一滴を下し、斯くの如く次第々々に東に去つて、彼の莫大な墨汁の盡きたる時に於て、假りに後を振り返へつて見よ、往き過ぎし無量無數の國土は、到底も汝達の數へ得る限りではなからう、而も彼の墨を點ぜると點ぜざるとを問はず、一切の國々を共に抹して、微塵となし、其一塵を一劫に譬へんに、大通智勝佛滅度の日より、今日に至る迄の時間は、更に彼數に、幾百萬億倍なるかを知らない迄に、遠き昔であつた。

然るに此の大通智勝佛、未だ國王でましました時、十六の王子がおはしました、此の國王が因位の修行を重ねて、成道し給ふや、先づ十方の梵天王――神――來つて、香華の供養、宮殿の奉上等、いと叮重を極めて、一心に聲を同うし、

世雄兩足尊、唯願はくば法を演說し、大慈悲の力を以つて、苦惱の衆生を度したまへ、

と請ひ願ふので、大通智勝佛は、梵天王の心をみそなはし、默然として之を許させ給ふた。

時に十六王子も、亦、父王の成道を聞き給て、親しく佛に見ゑ、法輪を轉じ給はん事を請ひ奉つるに及んで、十方の梵天王は、再度如來を圍繞し供養し終つて、願文を宣べて言く、

願はくば此の功德を以つて、普く一切に及ぼして、我等と衆生と、皆共に佛道を成ぜん、

と、此願文は、先哲之を「頂上の廻向文」と稱して、法華經の既信、未信を問はず、佛敎各宗各派の等しく尊重し、口に唱ふるのである。

茲に於てか、如來は、十方の梵天王竝に十六王子の請を容れさせ給ふて、先づ「四諦」「十二因緣」の法を說き給ふた。

【註】四諦とは、苦、集、滅、道であつて、一に苦諦とは、我等衆生が三界六道――地獄、餓鬼、畜生、修羅、

人間、天上――の苦報をいふので、二に集諦とは、諸の苦しみの報を得たのは、貪瞋痴の煩惱が集め起したものであることをいふので、三に滅諦とは、この惡業煩惱を滅し、生死の苦しみを離れ、涅槃寂滅の樂を得ることで、四に道諦とは、道を修し道を行ずることが、涅槃に通ずる道であることをいふので、この順序に小乘の行法があることが說かれたのである。

十二因緣とは、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死で、これは我等衆生が三世に亙り、輪廻する次第緣起をいふのである、一に無明は、前世の煩惱である、二に行は、前世の迷によつて作られた善惡の行業である、三に識は、前世の業に依て、現世の母胎に宿る一念をいふのである、四に名色は、胎中にあつて、身心俱に發育する位をいふ、名は心法である、心法は體を以て示すことは能きないから、但だ名を以て詮したので、これを名という、色は眼等の身をいふのである、五に六入は、六根――眼、耳、鼻、舌、身、意――具足して、母胎より出でんとする位である、六に觸は、生後二三歲、物事に對し、苦樂の識別なくして、物に觸れんとする位をいふのである、七に受は、六七歲より以後、漸く物事に苦樂を識別し感受するの位、八に愛は、拾四五歲以後、種々强烈なる愛欲を生ずるの位である、九に取は、成人以後、愛欲愈々盛んになつて、諸慾を取り求むる位、十に有は、愛取の煩惱に依りて業を作り未來にその果を所有する位である、十一に生は、現在の業に依りて、未來の生を受くるの位、十二に老死は、來世に於て老ひ死する位である。

この四諦、十二因緣の法門は、世に小乘佛敎と稱するのではあるが、現代の淺薄なる人生觀の如きものと同一視すべきではない、のみならず、凡そ佛敎の人生觀を窺はんとする程の者は、一度はこの四諦、十二因緣に說く所の人生觀を究めた上で、進んで法華經の人生觀に到るべき筈のものである、今此所には煩雜を避けて、名目だけ擧て置いた譯であるが、是非とも眞摯な研究を試みられんことをお勸めして置く。

その時、十六王子は、この四諦、十二因緣の法門を聽いて、人生の遷滅無常、憂悲苦惱を觀じ、一同に出家得道して沙彌となり、更に大乘を演說法し給へと、懇ろに請ひ奉つたので、大通智勝佛は、玆に「大乘妙法蓮華敎菩薩法佛所護念」と名付くる經王を說き給ひ、終つて大禪定に入らせ給ふた。

〔四〕王子の覆講

そこで十六の王子は、大通智勝佛に代り、各法座に昇つて、四衆――比丘、比丘尼

優婆塞、優婆夷――の爲めに、廣く妙法蓮華經を替る代る講說し、幾多の衆生を「示敎利喜」し、大菩提心を起さしめた、これを十六王子の覆講といふのである、十六王子の覆講終るや、大通智勝佛は大禪定より起つて、普く四衆に告げて宣はく、

是の十六の菩薩の、所說の經法を信じ、受持して毀らざらん者、是の人は皆、當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の慧を得べし、

と、重ねて諸の比丘に宣たまふには、

是の十六菩薩は、常に樂ひて、是の妙法蓮華經を說く、一一の菩薩の所化の、六百萬億那由佗恆河沙等の衆生、世々に生るゝ所、菩薩と俱にして、其に從ひて法を聞きて、悉く皆信解せり、此の因緣を以つて、四萬億の諸佛、世尊に値ひたてまつることを得たり、今に盡きず、

と、此意を更に偈文に、

在在の諸の佛土に、常に師と俱に生ず、

と說かれてあるが、との二句は洵に本品の骨髓である、法華經の「種」「熟」「脫」の大法門を論ずるに當つては、此の文を忘れてはならぬ、日蓮上人は此文の意義を判じて、

此世界の六道の一切衆生は、他土の菩薩に有緣の者一人もこれなし、法華經に云く、爾時聞法者各在諸佛所等云々、天台曰く、西方は佛所にして緣異る、故に子父の義成せず、

と仰せられてあるが、この十六王子の中にあつて、第十六番目は「我釋迦牟尼佛」にましました、經に云く

第十六は、我釋迦牟尼佛なり、娑婆國土に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり、

と、洵に我等娑婆世界の衆生は、一人として他土の佛に結緣の者ではない、獨り釋迦牟尼佛に依て、菩提の彼岸に導かれ、三千塵點劫の乃昔より、世々番々に、絕へず父子師弟の緣につながれて居るのである、實に子父の義の「成」と「不成」とは、我等成

佛得道の大問題である。

【註】種熟脫といふことは、我等衆生が、信仰に入つて成佛する迄の、進み行く有樣をいふたのである、種、とは、下種であつて、成佛の種を心田に下すこと、熟とは、下された佛種を、養ひ育てゝ、成熟せしむることである、脫とは、成佛解脫して、悟りに入つたところである。

〔五〕化城の譬諭

既に釋迦牟尼佛は、三千塵點劫の乃往より結ばれたる子父結緣の大義を開顯され、次いで三權一實、開三顯一の佛意を信解せしめんが爲めに、化城の譬を說かるゝに至つた、化城の譬とは斯うである。

此所を距ること五百由旬の遠き所に、一大寶處があつて、其所には無量の珍寶が山の如くにあるが、道は頗る險惡寂寥を極め、常の人の容易に到り得ぬ所である、然るに道の程を熟知せる一人の導師が先達となつて、多くの賈客の衆を伴ひ、珍寶を得んと寶所に出かけたが、道遠く加ふるに險惡で、彼等は疲れはてゝ、三百由旬のあたりでは最早一歩も進み得ない導師は「云何ぞ大珍寶を捨てゝ退き還りなんと欲する」と勵ましても、鞭つても、到底彼等は動くやうにも見ゑない、そこで導師は、此所に一大不思議力を以て、忽然一城を化作して衆に告げて曰く、汝等この大城の內に入り暫らく休息し、意を安穩ならしめよ、と、疲れきつたる彼等は大に歡んで、最早目的地に到達した積りで、再び勇を鼓して進まんともしない、かくて止むべきではないから、導師は忽然として化作の城を滅し、これは化作である、一時の休息處である、寶處は程近し、いざ進まん、といふが如く、如來の衆生救濟の方法も、これと同樣である、三乘の涅槃は實果でない、止息の故に設くる一時の化作に過ぎない、法華一乘の大涅槃樂こそ、眞實の寶處なれ、と敎へられた、これが化城諭の大略である、化城の譬に、執小の迷を去つて開三顯一を悟り、三千塵點劫の子父の結緣にさまされて、下根の衆は次の『授記品』以下に至つて、成佛の記別に與かるので、これが本品の大

要である、今化城の譬諭を法門に合するならば、

五百由旬の寶處＝一乘涅槃の果
三百由旬の化城＝三乘涅槃の果
有一導師＝釋迦牟尼佛
若有多衆＝一切衆生
險難惡道＝生死煩惱
中路懈退＝退大取小

古人はこの化城諭品の意を詠んで、

いそぎ立てこゝはかりねの草枕、なほおくふかしみよしのゝ里【八條院高倉】

五百弟子受記品第八

〔一〕本品の生起

釋尊は、上に化城諭品を說いて大通佛の因緣を語り給ひ、化城の譬諭を示して、開三顯一の妙旨を領解せしめんとし給ふの慈悲、更に一段の深さを加へられた、玆に宿世因緣の事を聞いた富樓那彌多羅尼子等の千二百の聲聞達は、漸く迷の雲霽れ、自利我執の邪見を除き、內に領解し、外に恭敬し、下根下智の聲聞を代表して、如來に對し默念解をなすに至つたので、釋尊は富樓那を、首め千二百の羅漢、五百の弟子に授記せらるゝのか、本品の生起である。

〔二〕題名の解釋

「五百弟子受記品」とは、總じて千二百の阿羅漢に、成佛の記別を授けやうとして、先づ五百の弟子に授記せられ、その名號同一に「普明如來」と名付けられた、この五

百人が、同一に普明如來の名號を授けられた大なる出來事に依つたのである、千二百の阿羅漢の中で、この會に居なかつた殘り七百の人達には、迦葉尊者をして、記別を傳へしめられた、經文に、

迦葉汝已に、五百の自在の者を知りぬ、餘の諸の聲聞衆も、亦當に復是の如くなるべし、其の此の會に在らざるには、汝當に爲に宣說すべし。

〔三〕默念解

その時に富樓那尊者は、上に四大聲聞が記別を授かるのを聞いて、心に歡喜し、法座から起つて、釋尊の御前に到り、禮拜恭敬せられたのである。これを經に、

唯佛世尊のみ、能く我等が深心の本願を知しめせり、

とあつて、內に領解するも、外に宣べず、これを富樓那の默念解といふのである、而してこの五百の弟子達が、明了に開三顯一の佛意を得悟し、過を悔ゐ自ら責め、衣裏繫珠の譬を以て、領解の旨を述ぶるに至るのである。

〔四〕本地の顯發

そこで釋尊は、富樓那尊者の本地――本身――を顯はしてその德を歎じ、以て授記せらるゝのである、富樓那は、佛弟子中第一の說法家であつて、その雄辯をもつて、釋尊の化導を助けて今日に到つたのである、經に、

如來を捨いてよりは、能く其の言論の辯を盡すものなけん、

といはれてあるから、慥かに大雄辯家であつたに違ひない、そして彼の德行は、內に菩薩の行を祕し、外に是れ聲聞なりと現ず、

と稱歎されてある、斯くて如來は、富樓那に「法明如來」の記別を授け、その國土の嚴淨を明かして、

人天交接して、兩ら相見ることを得ん、

と、いかにもその尊い國土嚴淨の樣が窺はれる、而かもその國の衆生は、

常に二食を以てせん、一には法喜食、二には禪悅食なり、

とあつて、法喜食とは、常に大法を聞いて歡喜する事で、禪悅食とは、法華三昧を以て身心を養ふことである、我等法華經修行の者は、必ずこの二食を以て身心を資けねばならぬ。

千二百の阿羅漢達は、上根の舍利弗、中根の四大聲聞次いで富樓那尊者と、續いて授記せらるゝを見て、我等も記別を得るならば、有り難い事であると念願し請願した、すると釋迦牟尼佛は、これ等の念願を知しめして、大迦葉に告げて、この千二百の阿羅漢達にも今現前に於て、授記するであらうと仰せられた。

〔五〕五百の記別

五百の阿羅漢達の、優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿兔樓馱、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀等皆記別を得て、悉く「普明如來」の名號を授かつた。

この中の莎伽陀とあるのが、有名な周利槃特といふ羅漢であつて、この人は多くの佛弟子の中に、健忘性の第一の人であつた、謂はゞ、愚鈍の人である、自分の名をさへ忘れる位の愚かさであつた、或時、外道が彼が自己の名前を忘るゝ愚鈍を輕しめ嘲つた、すると周利槃特は、その外道に向つて、我が名は他人さへ記憶すればよい、自分には用がない、と答へた程の愚鈍の代表者でも、正見にして正信であつたので、法華經に來つて、普明如來となつたが、これは末代の凡夫の我等には、他事と思ふてはならぬ、大事な事柄である、何れ我等は、唯信無解の周利槃特の仲間である。

〔六〕繫珠の譬諭

さてこの五百の弟子達は、身心共に歡喜踊躍し、佛足を禮し、これ迄の永昔の迷

を悔ゐ、自からを責め小智の足らざりし事を耻ぢて、「衣裏繫珠の譬諭」によせ、心中の領解を述べた、その譬諭は斯うである。

或一人の愚人が、日頃親しい友の家の酒宴に招かれた、山海の珍味を以てもてなされて遂に其所に醉ひ伏した、この時親友は、急に官の用事を帶びて他國に行かんとしたが、醉へる友は夢深ふして醒めないので、親友は價の幾許とも知れぬ立派な寶珠を、友の衣の裏にかけて呉れて去つた。

彼は醉ひ伏してこの事を知らず覺らずして居たが、起きて親友の家を辭した、固より愚かにして糊口にも窮し、諸國を流浪して衣食の爲にあらゆる辛酸苦勞を嘗め、少しでも衣食の料を得れば、これに滿足するといふ哀れな境遇であつた。

然るに親友は、官の用務を終へて國に歸り、ふとして再び哀なる友に出遇つたが、その落魄した有樣を見て、なんたる意氣地のない事であるか、拙い哉丈夫！　衣食の爲に汲々として、少し許りの得る所を以て滿足するとは何事ぞ、我れが曾て汝を念ふの餘り、某年某日、汝が我が家で醉ひ伏して醒めないで居た時に、斯ることがあつてはと思つて、無價の寶珠を汝の衣の裏にかけて置いたが、その珠は今も尙、汝の衣の中に包まれて居るではないか、この寶珠は、如何なる物でも買ひ得ることの能きるものを、それを知らないで、自活の道に窮して、その見素ぼらしい姿で諸所を流浪するとは、何んといふ痴漢ぞ、と誡しめ訶責を加へたやうに、我等は尊い佛の種を心に藏しながら、それに氣付かず、六道を輪廻し、僅かに小乘の悟りを得ればそれに滿足して、三乘方便、一乘眞實を知らず、今日迄過ぎ越し來た事は、恰も愚かしい彼の醉人の如きものでありました、と五百の弟子は領解したのであつた。

夢さめて衣のうらをけさ見れば、玉かけながら迷ひぬるかな、

と慈悲大僧正は、譬諭の意を詠まれたが、如何にも我等は果敢ない迷の凡夫である。

この譬諭は、十六王子の結緣を領解したものであつて、よく因緣說の佛意を述べ顯して居る。

〔七〕法諭の合譬

今これを合譬するならば、

一、有人――聲聞緣覺、二、親友――釋迦牟尼、三、醉酒――無明煩惱、
四、官事――他所敎化、五、寶珠――一乘法華、六、衣裏――信樂慚愧、
七、繫珠――過去結緣、八、不知寶珠――退大取小、九、小分衣食――小乘小果、
十、後日再會――今番出世、十一、指示寶珠――今番化導、

授學無學人記品第九

〔一〕本品の生起

釋迦牟尼佛の御子羅睺羅尊者と、佛の侍者である阿難尊者、及び二千人の學無學の羅漢達は、舍利弗首め四大聲聞竝に其他の人々の受記作佛の光景に、親しく接し乍ら、自からは未だ親しくその數に入ることを得ず、心密かに我等も共に授記せられん事を念じて居つた、固より佛の大慈悲は、一切衆生に平等である、既に上中下根の殆ど總ての大羅漢に成佛の記別を授けた上は、今この二千の學無學の衆にも授記して、一切の權小の行人を、悉く法華開顯の法雨の下にて、等しく霑はしめらるゝのが、本品である。

〔二〕題名の解釋

「學無學」の人とは、小乘修行の人であつて、而もなほ修學す可き餘地のある者を學人といひ、修行の成就した者を無學の人といふのである、卽ち眞空の理――小乘の悟り――を研き、見惑――五官の上に起る迷妄、思惑――思想の上に起る迷妄――の煩惱を斷じつゝある人を、學人といひ、見惑思惑を斷じ盡して、眞空の證智の位にあ

る人を、無學の人といふ、本品には、先づ阿難羅睺羅の授記があつて、次で學無學の二千人の授記があるが、この二千人は同時に同一名號寶相如來として、授記せらるるので、特に授學無學人記品と題せられた所以である。

〔三〕二人の請記

爾の時に、阿難羅睺羅の二人は、心に佛の授記を念じつゝ、座より起つて佛足を禮拜し、俱に佛に向つて、世尊、我等二人も最早授記に與かることが能きましやうか、我等は、共に廣く世人に尊敬せられ、殊に阿難は侍者として、如來の法藏を護持し、羅睺羅は、世尊の御子である、若し二人が、こゝで授記を頂戴することが能きやうならば、我等二人の滿足はいふ迄もなく、世の人々の望もまた足りる事と思ふ旨を、白し述べた、するとこの時、學無學の二千人も、阿難羅睺羅と同じ念ひで、佛前に到り一心に合掌して佛に向ひ奉つた。

〔四〕阿難の授記

阿難のいと懇切な請に由て、如來は、「山海慧自在通王如來」と、彼に記別を與へられた、茲に於て、一會の中の新發意の菩薩八千人は、一つの大な疑念に逢着したのであつた、其は外でもない、菩薩でさへ無量劫といふ永い時間の修行の功德に依て、始めて成佛得道することを許されてあるにも拘らず、僅かに開三顯一の道理を信解する事が、聲聞をして斯くも手易く、速かに成佛の記別を得せしむるとは、抑も如何なる因緣に依るのであらうか、と疑惑を惹起した。

時に釋尊は、これ等新發意の菩薩の疑惑を去らしめんとして、彼等に告げらるゝやう、實は彼れ阿難は、遠き過去世に空王佛の御下に於て、我れ釋迦牟尼とは同學の仲間であつた、然るに我れは精進の力に依て先に成佛し、阿難は多聞の力に依て經々を奉持して今日に至り、今は我が侍者となつて奉仕して居るが、彼の本地には、斯る甚

深の因緣のある由を告げられた、斯くして迹門も、漸く終に近くに連れて、漠然ながらにも、廢迹顯本されて來るが、本門に來なければ、八千の新發意の菩薩が懷いたこの疑網は、未だ充分に除斷さるゝことは能きない。

〔五〕羅睺羅の授記

釋迦牟尼佛は、次で羅睺羅尊者に向ひ、我れ未だ淨飯王の太子であつた時、汝羅睺羅はその長子と生れ、成道の今日は法の子となつて居るが、未來の世々に、汝は諸佛の長子として一心に佛道を求め、遂に成佛して「蹈七寶華如來」となるであらう、と記別を授けられた、この羅睺羅は、十大弟子の中で密行第一と呼ばれて、實は元より菩薩である身を、假りに小乘の人として、迹を以て本を隱し、如來の化導を助けて居るのであつた。

〔六〕學無學の授記

阿難羅睺羅の授記を終へて、釋迦牟尼佛は、學無學二千人の請を容れさせられ、一同に、「寶相如來」の名號を以て授記せられた、時に二千の聲聞は、歡喜身に充徧して、

世尊は慧の燈明なり、我れ授記の音を聞きたてまつりて、心の歡喜充滿せり、甘露を以て灌がるゝが如し、

と、如來を讃歡し奉つて、茲に一品はその終を告げて居る。

法師品第十

〔一〕本品の生起

迹門の正宗分は、全く前品に於て終を告げ、以下の五品は、迹門の流通であつて、本品はその最初である、釋尊は、この經典と持經者を讃歎し、更に宣傳修行の功德を宣べ給ひ、如來在世の衆を化益し給ふのみならず、又、滅後の衆生を憐愍し、進んで末世の行人をして、愈々、法華經修行の發心を、啓發勸奬し、以て弘經の方軌を示し給はんが爲に、本品の生起を見るに至つたのである、而して法華經は、「法師寶塔に事起り、涌出壽量に事顯れ、神力囑累に事竟る」とて、當品よりして漸く大事な法門が說かるゝのである。

〔二〕題名の解釋

この品の題名は、釋に、

法師とは、法は軌則なり、師は訓匠にして、法可軌なりと雖、體自ら弘まらず、之を通ずること人に在り、

とあるが、一言でいへば法師とは、如來の、法を奉持し、これを普く世間に宣傳する人である、然し唯、出家に限ぎられた名前ではなく、在家俗人と雖も、法を信じ世を益するならば、等しく法師である、本品には五種の法師の資格を明して、法華修行の相貌を示し給ふので、「法師品」の題名があるのである。

〔三〕五種の法師

釋尊は、藥王菩薩を對告衆として、仰せらるゝに、妙法蓮華經の一偈一句を聞いて、一念も隨喜をなさんものには、皆成佛の記別を授け、大菩提を得せしむるであらう、と、佛在世の衆に化益を示され、又、滅後の衆の爲にも同じやうに、妙法華經の一偈一句を、一念も隨喜するものは、記別を得て正覺を成ずるであらうと說かれて、五種の法師を示された。

五種の法師とは、一に受持、二に讀、三に誦、四に解說、五に書寫の五つの法華修

行を身に行ふ人、これが法師と稱せらるものである、この五種の修行を要解するならば、

受持とは、いふ迄もなく身と口と意の、三業の中の意業に當るのである、「信力の故に受け、念力の故に持つ」、といつて、經典の意義を了解し、佛意を信解し、造次顛沛にも、餘念なく魂に染めて、修行する事である、讀とは、經典を手に把り、口唱し修行する事である、誦とは、修行も一段增進して、經典が暗誦の能きるだけの修行の事である、解說とは、內に信心の精神充實して、他の人に向ひ、演說說法をもするさまをいふのであつて、この讀誦解說の三つは、口業である、書寫とは、「憶持不忘の善根」とあるから、これも令レ法久レ住の上には大切な修行で、古來、經典書寫の歷史は頗る盛んであつた、これは身業である。

斯樣に五種の修行は、何れも大切であり、重要な修行であつて、三業相應の信心であるがいふ迄もなく、この五種の修行中では、第一の受持の一行が根本であつて、この受持の缺げた讀誦解說書寫は、精神の亡んだ徒事である事を忘れてはならぬ。

而して經文は、次に十種の經典供養を擧げられた、その十種の供養とは、華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繒蓋、幢幡、衣服、伎樂である。

四　行人の宿善

釋尊は、藥王菩薩に告げて宣ふに、この經を修行し供養せん人々は、過去に十萬億の御佛を供養した宿善の者であると說かれた、經に云く、

藥王當に知るべし、是の諸人等は、已に曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て、大願を成就して、衆生を愍むが故に、此の人間に生れたり。

と、而して未來の成佛は疑ない、日蓮上人曰く、

かゝる御經に、一華一香を供養する人は、過去に十萬億の佛を、供養する人なり、と仰せられた、次で經文には、

善男子、善女人、我が滅度の後に、能く竊かに一人の爲にも、法華經の、乃至一偈一句を說かん、當に知るべし、是の人は則ち如來の使なり、如來の所遣として、如來の事を行ずるなり、何に況んや、大衆の中に於て、廣く人の爲に說かんをや、

と、肝銘す可き要文ではないか、日蓮上人曰く、

經に云く、能說二此經一能二持此經一の人、則ち如來の使なり、八卷一卷一品一偈の人、乃至題目を唱ふる人、如來の使なり、始中終すてずして、大難をとをす人、如來の使なり、

と我等を諭された。

更に釋尊は、持經者修行者を護念せられて、若し惡人があつて、一劫といふ永い間、佛を誹謗する其の罪は寧ろ輕いが、一つの惡言を以て、法華經を修行する在家出家をそしらんその罪は、甚だ重いぞ、と誡められたのであつた、何故ならば、彼等行人はかよわき者であるから、若し彼等を毀訾するならば、修行を退轉し、遂には信仰を捨つるにも至るであらうからであつて、佛意のほど眞に剴切を極めて居る、さればこれに反して、僅かたりとも持經者を歎美するならば、その功德は限りなきものである、

日蓮上人曰く、

是程に貴き敎主釋尊を、一時二時ならず、一日二日ならず、一劫が間、掌を合せ、兩眼を佛の御顏にあて、頭を低れて他事を捨て、頭の火を消さんと欲するが如く、渴して水をおもひ、飢へて食を思ふが如く、間なく供養し奉つる功德よりも、戲論に一言繼母をほむるが如く、心ざしなくとも、末代の法華經の行者を讚め供養せん功德は、彼の三業相應の信心にて、一劫が間生身の佛を供養し奉るに、百千萬億倍すべし、と說き給ひて候、

と、從つて聞經の功德の廣大なることは、經に、

須叟も之を聞かば、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得ん、

とあつて、この經の功力の廣大なることを、知ることが能きる。

〔五〕三說超過

釋尊は、更に藥王に告げ給ふに、

我が所說の經典、無量千萬億にして、已說、今說、當說あり、而も其の中に於いて、此の法華經、最もこれ難信難解なり、

と、これは本品中有名な要文であつて、已說とは、法華已前の經々を指し、今說とは、無量義經であつて、當說とは、涅槃經をいふのである。

この經文は、正しく法華經が大藏全典の帝王經であることを示すので、何人も異議することは能きぬ、已今當の三字は、法華經以外の一切經典を網羅した文字であつて、餘經には見る事の能はぬ大切な三字である、而して「難信難解」の文字は、佛敎では最爲第一と異語同義である。

斯る尊い法華經であるから、如來の現在にすら五千起去の人があつた、まして滅後に怨嫉の多いのは、當然の事である、故に經には、

而も此の經は、如來の現在すら、猶怨嫉多し、況や滅度の後をや、

とあつて、此の經を弘通し修行せん者は、この經文を身に讀む覺悟を持たねばならん、されば如來の滅後に於て、この覺悟を以て法華經を修行する人をば、如來は、則ち衣を以てこれを覆ひ給ひ、如來と共に宿り、如來は手づからその頭を摩で給ふて、愛念し護念してくださるのである、その上、如來の全身は、この經の中におはしますのである、斯く述べ來つて、我等は益々この經の功德の深大なるを、感ずるのである。

〔六〕弘經の三軌

斯くして釋尊は、如來の滅後にこの法華經を修行し弘通せん者の心得として、「弘經の三軌」を示され、須らく、如來の室に入り、如來の衣を著、如來の座に坐して、四

衆の爲に弘經せよと仰せられたが、これを衣座室の三軌といつて、實にこの心地に在つてこそ、始めて能化者の資格を得るのである、如來の室とは大慈悲心であり、如來の衣とは柔和忍辱であり、如來の座とは一切法空――我見我執を離る事――これである、この三軌こそ、我等末法に於ける行人の明鏡である。

如來は、斯の如く弘經の三軌を示して、末法の法華經弘通を勵げまされると共に、又、人々に菩提の志を啓發せんとして、名高い「穿井の譬諭」を說かせられた、卽ち、

或人が高地に在つて、水を求めて地を掘り始めたが、始めは掘つても穿つても乾土を見るのみであつたが、漸く濕土を見、更に努めて止まなければ泥土に達して、遂には水を得るやうに、中道實相の智水も、阿含小乘の乾土を穿つて、方等般若の濕土を過ぎ、一乘法華の泥土に到らば必ず汲み得らるゝものであるぞよ、と、慇懃に說き示されて、人々を策勵遊ばされたのであつた。

以上で法師品の大樣は、その要解を終つたが、この一品は、我等の信心を勸發する上に、誠に大事な經典であるから、是非共、親しく經文に就いて、佛意を信解する事が大切である。

〔七〕要文の解釋

▽小乘開會の文

聲聞の法を決了すれば、是れ諸經の王なり、

この文は、阿含開會の文ともいはれて、尊重す可きものである、本品の中に、「此の經は方便の門を開いて、眞實の相を示す」とある如に、法華經は統一經であつて、決して理由もなく餘經を破するものではない、法華經は、經王である、經王法華には、餘經に對する生殺與奪の權能があるので、餘經から法華を望むのは、下尅上である、であるから法華經に到つて、眞實相を示さるゝ場合に、聲聞の法は決了されて、一乘

法華に開會さるゝ事を忘れてはならぬ。

▽念佛故應忍の文

若し此の經を說かん時、人ありて惡口を以て罵り刀杖瓦石を加ふとも、佛を念ふが故に、應に忍ぶべし、

この經文は、法華行者の日夜に、肝銘す可き座右銘であつて、念佛故應忍の五字を、心に懸けて始めて、忍辱修行は成就するのである。

▽則遣變化人の文

若し人惡りに、刀杖及び瓦石を加へんと欲せば、則ち變化の人を遣はして、之が爲に、衞護を作さん、

如來が、行者を愛念し給ふ大慈悲は、この一句に溢れて居る、身は輕く卑しいが、法は重く貴い、如來は、行者を守護せられんが爲には、陰に陽に、變化の人を遣はして、行者を護らせ給ふのである。

見寶塔品第十一

〔一〕本品の生起

前品の法師品に於て、法華修行の功德の、餘りに廣大無邊であるが故に、若しや不信の人もあらんかと慮つて、玆に多寶如來の證明が現はれたのである、凡そ事を信ぜしめんには、事實を示し見せしむるに過ぐるものは無い、であるから執權執小の迷情を曉して、實乘法華の佛意を獲せしめんが爲に、寶塔の涌現を要するに至つたのである。

この寶塔涌現について、肝要な二大法門は、「證レ前」「起レ後」と言ふことで、多寶如來の、皆是眞實の證明が、方便品以下に說き給ふた開三顯一の妙義を顯揚し、此經の功德に對して、一會の大衆の信心を、更に一層增進せしむるを、證前と云ひ、無數の

分身佛を召集めて、釋尊の久成をほのめかし、將に壽量顯本の奥義を開發せんとする事が、起後の意である、是れ本品の生起である、日蓮上人曰く、

寶塔をことわるに、天台大師文句の八に釋し給ひし時、證前、起後の二重の寶塔あり、證前は迹門、起後は本門なり、或は又、閉塔は迹門、開塔は本門是れ卽ち境智の二法なり。

〔二〕題名の解釋

「見寶塔品」とは、本品の中に、

爾の時に佛前に七寶の塔あり、高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬なり、地より涌出して、空中に住在す、

とある如く、七寶を以てちりばめた高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬の寶塔が、大地から涌出で、虛空にとゞまり、一會の四衆、此の奇瑞を見るが故に、題して見寶塔品といふのである、塔とは、文句に、

梵語には塔婆、此には方墳と翻ず、亦は靈廟と云ふ。

如來の、出生の處、得道の處、轉法の處、入滅の處、この四處に於て、寶塔は起てらるゝのである。

〔三〕寶塔の涌現

法師品を說き終らせ給ふや、釋迦牟尼の佛前に、七寶の大寶塔、忽然として大地より涌現し、天にもつかず、地にもつかず、天地の中間、虛空の中央に懸つた、是れ中道實相の妙理を表示するの佛意であらう、寶塔莊嚴のさまを經に說いて、

種々の寶物をもつて、之を莊校せり、五千の欄楯ありて、龕室千萬なり、無數の幢旛、以つて嚴飾と爲し、寶の瓔珞を垂れ、寶鈴萬億にして、其上に懸けたり、四面に皆、多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充偏せり、其の諸の旛蓋は、金、銀、瑠

璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶を以つて合成せり、

とある如く、我等の思慮を超へ、言語に絶へ、筆紙の及ばざる、眞に妙美の極みである。

この大寶塔の現はるゝや、先づ諸の天人は、美しい天華を雨らして、寶塔を供養し、更に馥郁たる妙香、莊麗なる瓔珞、旛蓋、伎樂を以て奉上し、恭敬尊重を盡して、この寶塔を讃歎し奉つた、今や靈山は、本地の風光を顯はし、一會の四衆は、その靈光にうたれて、大寶塔を瞻仰した、其時に寶塔の中より、靈山の一會に、大梵音が響き渡つた。

善い哉、善い哉、釋迦牟尼世尊、能く平等大慧、敎菩薩法、佛所護念の妙法華經を以つて、大衆の爲に說きたまふ、是の如し、是の如し、釋迦牟尼世尊所說の如きは、皆是れ眞實なり、

この證明法華の大文字は、正しく法華以前の經々は方便であり、假說であり、權經である、と喝破された金口の妙音ではないか。

この梵音を聞いた四衆は、大寶塔の中の大音聲は、ソモ如何なる御佛の出し給ふ所で、ソモ何事を曉し給はんとてか、と佛意の程を忖度かねて、驚疑の中にも一種の法悅を以て、起つて寶塔を恭敬し、合掌し、この疑を解き、この驚きを醒し給へ、と心待ち顏に待ち構へた。

〔四〕大樂說の疑問

大樂說菩薩は、大衆の疑惑に代つて、如何なる因緣に依つて、斯かる稀有の大寶塔は現はれたのであろうか、何故に、かくは大地より涌出したのであろうか、而も何が故に、塔中にこの大音聲を聞くのかと、三箇の疑を以て、釋尊に問ひ上つた。

〔五〕釋尊の爲養

釋迦牟尼佛は、大樂說菩薩が、衆疑に代つて、叮重なるこの問を受けて、答へさせ給ふには、此寶塔の中には如來の全身まします、乃往過去の世、東の方に當り、寶淨世界と云ふ佛國があつて、其處に多寶如來といふ、佛がましました、この佛の因位の修行の時、一つの大なる誓願を發し給ふて、我れ成佛の後、十方いづれの國土にても、法華經を說き給ふ處あらば、我は寶塔のまゝに、法華說法の會座に來往涌現し、其の所說の經に、皆是眞實の證明を宣べ、讃めて、善哉、と云はん、と。

更に多寶如來成道の後、入滅の時に臨んで、大衆に告げて宣はく、汝等我が涅槃の後に、我が全身を供養せんよりは、一大寶塔を起てよ、と。

而して、この佛の願力空しからず、斯くは、今我が所說の法華經を聽かんと思召して、大寶塔に乘じ、大地より涌出して、善哉善哉と證明し給ふのである、と、いと懇ろに、釋迦牟尼佛は答へさせ給ふた。

〔六〕分身の來集

斯くて大樂說菩薩は、多寶塔涌現の因緣を聞き、釋迦牟尼佛神通の力に依つて、寶塔の中にまします多寶如來を見上らんと欲し、其の望を佛に白上げた、然るに釋迦牟尼佛は、この菩薩に告げ給ふに、この多寶如來には、深重なる御誓願があらせらるゝので、身を四衆に示し給へと請はんには、我が分身の諸佛を此處に召し還し、一所に集めての上でなくてはならぬ、輕々しく身を衆に示現することは、能きぬとの事であると、仰せられた。

こゝに大樂說菩薩は、然らば亦、釋迦牟尼佛の分身の諸佛を禮拜供養せんの志を白上げたので、

爾の時、釋迦牟尼佛は、眉間白毫の光を放ち、分身の諸佛を召し給ふや、十方世界の分身の諸佛は、所化の衆に告げて、我れ今娑婆世界釋迦牟尼佛の御所に往いて、多

寶如來の寶塔を供養せん、と仰せられた。

因みに分身といふ事は、本地垂迹の關係を敎へたもので、恰も天の一月、池の萬水に影を宿すが如く、本佛釋尊が幾多無量の衆生應化の爲めに、種々に身を現じ、機に應じ、神通力に依りて、色々に身を分けて示し給ふ事である、卽ち本質影像の關係とも云ふ可きものである。

是時この娑婆穢惡の國土は、忽ちに變じて、淸淨なる佛國土と成つた、之れ國土嚴淨の光景である、斯くなつた時に、分身の諸佛は、各々一大菩薩を召し具して、十方世界よりヒシ〳〵と來集したのである。

時に釋迦牟尼佛は、無量無邊の分身の諸佛を容るゝに、神通力を以て、再び二百萬億那由佗の國土を擴けて、佛國土に變ぜしめられたが、尙分身の諸佛集ひ來るに依て、更に三度二百萬億那由佗の國土をも變じて、一佛國土と成し給ふた、之が法華經中で名高い「三變土田の法門」と云ふのであるが、之は古來種々の解釋があつて、如何なる佛意を表示されたのであるかといふに、三乘卽一乘、一乘卽三乘、開三顯一の妙旨が分明に顯はれたものであると信ずる、娑婆卽寂光の妙談も、穢土卽淨土の妙致土、この法門の中にうかゞはれるのである、正報たる自己に生佛一如が、語らるゝならば、依報である國土にも、淨穢不二が論せらるべきは、理の當然で、進んでは正依不二が又法華の經意である。

〔七〕開塔の與欲

前述の如く靈山は、三變土田して、一佛國土となり、集まり來れる十方分身の諸佛は、此の七寶の大寶塔を開き給はん事を與欲ふて、釋迦牟尼佛に對し、慇懃叮重に問訊せられた、問訊とは、通俗に申せば、伺候見舞に相當るのである。

そこで釋迦牟尼佛は、諸の分身が、師子の法座にあるを見そなはし、開塔を與欲ふを聞こしめして、やをら靜けく、法座を立ち虛空に住し給ふや、一切の四衆は何れも

起立し、合掌して一心に佛を見奉つてゐた、茲に於て釋尊は、右の指を以て七寶塔の戸を開かれた、其音聲は、

關鑰を卻けば、大城の門を開くが如し、

とあるから、如何にも其の構想の絶大無限なる光景が窺はれる、分身の諸佛は、多寶如來の寶塔の中にましまして、

全身散ぜざる、禪定に入るが如き、

の御有樣を見上つた、その時多寶佛は、

善い哉善い哉釋迦牟尼佛、快く是の法華經を說きたまふ、我是の經を聽かんが爲の故に、而も此に來至せり、

と仰せられた、是を聞いた四衆は、無量億劫の過去に、滅度し給へる多寶佛の、是の如きの言を聽くことを得て、未曾有なるを讃歎し、天華を釋迦多寶二佛の上に散じ供養した、その時に多寶佛は、半座を分ちて、釋迦牟尼佛に讓つて、坐せしめ給へと仰せられた、すると、釋迦牟尼佛は、其の寶塔の中に入らせられた、結跏趺坐し給ふた、日什正師曰く、

凡そ寶塔は妙法所在の宮殿、諸佛恆居の心城、薩埵來集の住所、五輪本分の全體なり、多寶はこの塔に乘じて證明を垂れ、釋尊は分身を召して塔を開き、二佛塔中に竝んで、付屬有在と唱へ、六難九易を擧げて末法の導師を求む、

と、釋迦牟尼佛七寶塔中、說法の御儀式の光景と、彼の壯麗崇高なる、高御座御卽位の聖儀の光景とが、不可思儀にも一如せる事は、如何にも尊い事である、斯くなると大衆は、如來の神通力を以て、我等をも虛空に俱に處せしめ給はん事を願つた、茲に於て卽時に、釋尊は、神通力を出し、大衆を殘りなく虛空に住在はせられた、經には、

諸〳〵の大衆を接して、皆虛空に在きたまふ、

とある、日蓮上人が、

寶塔品に云く、接二諸大衆一皆在二虛空一云々、これらの佛菩薩大聖等、總じて序品列座の二界八番の雜衆等一人ももれず、此本尊の中に住し給ふ、と仰せられた聖訓の意義も、明了に信解し得らるゝわけである。

茲に注意すべきは、この所より法華經第七卷囑累品第廿二の、多寶佛塔還可レ如レ故の文に至る迄を、正しく虛空會の說法と稱するのである。

【註】法華經を、三處三會の說法といふのは、初は靈山、中ばは虛空、終りに再び靈山で說法せられた、場處は靈山と虛空の二處で、法座は三會に亘るから、二處三會の說法といふのである。

〔八〕釋尊の唱募

斯くて釋迦牟尼佛は、寶塔の中より大音聲を以て、普く四衆に告げ給ひて、誰か能く此の娑婆國土に於いて、廣く妙法蓮華經を說かん、今正し　是時なり、如來久しからずして、當に涅槃に入るべし、佛此の妙法蓮華經を以つて、付囑して在ること有らしめんと欲す、

と、是れを「三箇の告勅」と稱するのである、卽ち三箇の告勅とは、

一、大聲を以て唱募す、

二、付囑時の至れるを明す、

三、付囑有在を明す、

以上の三つである、この法門が軈て壽量品の顯はるゝ遠序となるのである。

さて此の寶塔は、如何なる事を表示せられたのであるか、是には種々の解釋があるのであるが、要するに、多寶如來の不滅の全身を示されて、人格實在の妙義をほのめかされたものであると思ふ、日蓮上人が、

所詮三周の聲聞、法華經に來つて、己心の寶塔を見るといふ事なり、又、聞、信、戒、定、進、捨、慚の七寶を以て、かざりたる寶塔也、

と仰せられたが、この寶塔の涌現には、實に無量の經意の存することを知らねばなら